理事長登壇 ②

愛知クラブ連盟理事長
太田耕治
（名古屋大学OB）

　クラブ連盟理事長として、日本協会に何を望むかという注文であるが、希望だけ並べることの虫の良さ。まずは、当連盟の活動報告の中から、多少でも御注文に対する返事が現われれば幸である。

　当連盟の主な行事は、春秋二回のリーグ戦と秋に行う東海クラブ選手権であるが、体育館の確保が次第に困難となっている。特にリーグ戦は、四部合計二〇チームの参加により、一ケ月以上の日程を必要とする。名古屋市内には、県市各一の体育館しかなく、体育館はほぼ飽和状態となっており、純粋の練習の為に体育館を使用することは全く不可能である。何はさておき、体育館の増設こそ、ハンドボール愛好者のみならず、バスケット、バレー、バトミントン、卓球等の愛好者のまち望むところであり、これなくして、クラブの健全な発展はありえない。その促進の為には、各種スポーツ団体が協力することが必要であり、協会にも、不断の御努力をお願いする次第である。

　試合になると早速に問題となるのが審判である。当連盟も審判部が確立しておらず、他の試合の選手が他の試合の審判を行っているのが実情である。その結果、技術水準が低く、且つ権威のある判定ができないうらみがある。良い審判であれば、ゲームがひきしまり危険性も減少し、選手の技術も向上する。私としては、若干の費用負担によって、県協会から審判もしくは審判の監督者を常に派遣して貰えるような態勢を切望する次第である。

　当連盟は現在二〇チームより成り、毎年二チーム平均増加しているが、一部六チームは技術的にも相当なレベルに達している。このような実力派のチームにとっての当面の希望は全日本クラブ選手権の実現であり、全日本総合への推せんであろう。当連盟の主管する東海選手権は、曲りなりにも第三回を迎え、今回は一地方チームである蒲郡クが天下の雄桜丘会、清商クを斥けて優勝した。このような一地域を基盤とするチームが日頃の練習をみのらせて遂に所期の目的を果したということは、正にクラブ活動の真髄というべきであり、実によろこばしい。このような「より強いチーム」を目ざすクラブには、それ相応の目標が与えらるべきであり、ブロック選手権からブロック対抗を経て東西対抗に終る形式の全日本選手権の実現が早急に望まれるのである。

　我国のスポーツは、従来学校教育を中心として成長してきたものであるが、近時、実業団によるハンドボールが興隆し、当面「より強いチーム」作りは、実業団を別にしては考えられない状況となった。その間クラブチームは、単に学校OBの別名であるにとどまり将来に対する展望は全くなかったのである。しかし情勢は徐々に変りつつある。週休二日制の実現、経済的余力の増大が、誰に強制されるのでもない自分による自分の為のスポーツを発展させるであろうことは確実である。このような社会的に望まれるクラブがどのような型式のもとに存在すべきかは将来の問題であり、欧米先進国の歴史と我国の風土に合致したクラブ作りの研究及び指導が期待されるのである。

　最後にクラブの登録については付言しておきたい。私個人としては、クラブこそ協会の財源となるべきであると考えるが、それ迄には相当の年月を要するであろう。歴史の古いクラブは別として、新しいクラブは年齢層も若く、資金的にも余力がない。その結果、大会参加料やユニフォーム造りは何とか工面しても登録料迄は手が廻らないのが実情である。加うるに無登録による不利益は、今のところ国体への出場のみであるから、私としても、国体参加の望みのないチームにはなかなか登録を義ムづけられないのである。私としては、今望まれるのは登録チーム数の増大であり、その為には当分の間簡易な登録方法を認め、個人登録を不要として登録料を実質上減額するのも一方法でないかと考える次第である。そして登録チーム数が増大し、且つ全日本選手権が実現した時点で、登録方法をかえるのがよいのではなかろうか。とにかくクラブには、従来学校チームにも実業団チームにも問題、特に時間、費用、設備等すべてを自分で賄わなければならないという大問題がある反面、一旦基盤ができれば経済的にも、選手寿命の点に於ても相当な発展力を発揮する可能性があり、皆様方の御協力御指導を切にお願いする次第である

「ハンドボール」
12月号（第104号）目次

【表紙写真】日韓社会人交流三景―金山旅客自動車戦【撮影・山田真市】

日本、まず韓国と初の予選

世界女子選手権組み合せ決まる

国際ハンドボール連盟（IHF）は11月14日、来年12月7日から10日間ユーゴで開かれる第5回世界女子選手権の予選リーグ組み分け（3ヶ国ずつ4組）を発表した。

参加申しこみ国が19ヶ国にのぼったためヨーロッパで3カード、アジア、アフリカで各1カードの地域予選が行われることになり日本は初出場を目指す韓国との対戦が決まった。

男女を通じて世界選手権のためのアジア予選は初。日本×韓国の女子ナショナルが対戦するのも初めてのことである。

なお、規定により予選は48年4月15日までに2試合（原則としてホーム・アンド・アウェイ）を行うが日本協会は韓国協会と連絡をとり年内に細目を決定したい意向である。

本大会の組み分けは次のとおり

◇A組　ハンガリー（前回3位）、西ドイツ（同5位）、スウェーデン対チェコの勝者

◇B組　ルーマニア（前回4位）、フランス対ノルウェーの勝者、日本対韓国の勝者

◇C組　東ドイツ（前回優勝）、ポーランド対オランダの勝者、ソビエト対ブルガリアの勝者

◇D組　ユーゴ（開催国、前回2位）、デンマーク対オーストリアの勝者、コートジボアール対ギニアの勝者

日本、韓国で1試合ずつ

第5回世界女子選手権はモントリオール・オリンピック（一九七六）での女子実施が取り沙汰されていることもあってエントリーは19ヶ国とこれまでにない数字を示した。女子にあまり力を注いでいなかったフランス、オーストリアや男子の世界選手権にも申しこみをしたことのないコートジボアール、ギニア、韓国などが顔を並べたのは注目してよいだろう。

韓国の登場について日本協会内部の観測はまちまちだったが、荒川理事長は「出てくるとみていた」という。

11月18日の月例常務理事会でも予選の実施を意外と受けとるムードはなく、IHFの指示どおりホーム・アンド・アウェイ（互いの国で1試合ずつ）で行うよう12月に入って準備を進めることを申し合わせるなど落ち着いたものだった。

韓国女子の実力については、トップチーム・白花醸造（ソウル）の再三の往来である程度はつかめているが、このチーム以外は昨夏梨花大が来日しただけで詳細な資料は限られた範囲に留っている。

数年前から韓国は高校女子の交流実現になみなみならぬ意欲を示しており、かなりの自信を示していたことなどから〝温存された力〟があるのでは、とみる人も多い。

昨秋のオリンピック予選（男子）の時もベールに包まれた韓国ナショナルのチーム力に無気味さを感じたものだが、今回も楽観は許されまい。

ところで、日本の代表チームだが、現段階では31名のナショナルプレイヤーがリストアップされているだけで（＝本誌既報）その他はまったく白紙。

11月17日大阪で開かれた技術指導部の総会で「世界選手権候補選手」約20名が検討されるハズだったが、コーチングスタッフのノミネートが先決という意見が支配的となり、結局コーチングスタッフも候補選手も決まらずじまいである。日本協会常務理事会では勝技術指導部長を中心に同部によってつくられた原案の提出を待っており、12月中旬までにはメドがつけば来春1月強化合宿（東京）を予定している。

男子も予選実施か

日本協会は11月18日の月例常務理事会で世界女子選手権に韓国が参加申しこみをしたことから、つづく世界男子選手権（49年2月・東ドイツ）にも韓国が申しこみを行う可能性が濃くなったとみ、このほかイスラエルの参加についてもその公算が強いというみかたをまとめ新指導陣の編成を急ぐことになった。

IHFの一部には同選手権の上位国にモントリオール・オリンピックの自動的出場権を与えたら、という動きがあるとも伝えられる

中学界からも3選手

懸案の全日本ジュニア 学生中心に32選手

次代を背負うホープたちを網羅した「全日本ジュニア」（ヤング・ナショナル）が編成された――全日本ジュニアの選考を進めていた技術指導部は11月17日大阪で全国委員会（総会）を開きその原案を作成、18日の月例常務理事会で勝部長が発表、承認をうけたものである。

全日本ジュニアは、ナショナルチームにつづくトップ層の厚味を増すことと、ナショナルプレイヤーへ刺激を与えることを目的としたもので、42年11月23日の技術委員会（当時）で初めて検討されて以来実に5年ぶりに〃実現〃をみたわけだ。

選考の対象は長身・将来性・特異（個性的）な技能の3点を基準にし、22才までの選手に限定したことが大きな特色である。（22才をこえてナショナルへ進めないものは自動的にふるい落とされる）

当初の予定では、全日本ジュニアとせず「ナショナルB」としてAチームの予備軍的な内容を目指したが、あくまで次代のナショナルを育てるファーム組織とすることに変わり、勝部長は「ナショナルプレイヤー養成所」とも表現している。

このため、年令に制限があることから、ナショナルとの入れ替えについては制約が生まれたわけで近い将来にはナショナルA、同Bジュニアの三本建てが採られるとみられ、そうなれば選手の入れ替りはA―B間のみで、ジュニアは「送りこみ」一方となる。また、現時点では、ジュニアを経ずナショナル入りを認めることにしているが、やがてはすべてナショナルへの道はジュニアを通ってからになりそうだ。

学生が半数を占める

32名に及ぶ初のジュニアのメンバーで注目されるのは学生勢が圧倒的な数を占めたことと3人の中学生が加えられた点だろう。

学生が3年生以下と制限をうけながら17人と半数をこしたのはその年令、活躍の場の多さからみて当然ともみられ、今後もこの傾向はうすれることがないと思う。

中学生のリストアップは思い切った処置であり、3人とも大型選手である。しかし、中学生をジュニアナショナルに加えることには種々の問題があるのでまず所属中学の了承をとってからにしたらという常務理事会の意向を入れ、勝技術部長は関係各筋に手続きをとり、氏名その他はおって発表することにした。

中学生選手が強化合宿に参加できるかどうかは問題を残すが、3選手とも高校へ進んでハンドボールをつづけることを明きらかにしているといわれ、今後が楽しみだ。

多士済々の高校界からは選手が選ばれた。関選手を除いてはいずれも今年度高校優秀選手（＝本誌前号既報）。今回あげられた大学1年生のFP4選手のうち3選手は昨年度の高校優秀選手という点でも順当な人選といえよう。

実業団の6選手はいずれも実績のある人たち。異色は兄弟で選ばれた柳川と自衛隊球界から初めて全日本級のチームに加った中水流（なかつる）だろう。

このメンバーによる初の合宿は来春早々東京で行われる予定で、コーチ陣は年内に決められよう。

なお、女子については当分の間ジュニアを編成する意向はない。

全日本ジュニア（32名）

GK
柳川　清（大同製鋼・21才・175）
福井　秀人（中京大3年・179）
柴田　政章（法政大1年・186）
斉藤将一郎（日体大1年・185）
小松伊佐夫（湯沢高3年・180）

FP
林　恒雄（大崎電気・21才・184）
菅　広明（湧永薬品・22才・177）
柳川　実（大同製鋼・18才・178）
沢田　富男（大崎電気・21才・178）
中水流和則（海上鹿屋・20才・173）
細江　守男（日体大3年・175）
牧野　彰文（同志社大3年・176）
穂積　豊彦（大経大3年・181）
津川　昭（大経大3年・180）
福井十志男（京都産大3年・183）
夏目　真治（中京大3年・181）
中村　博之（大体大3年・179）
喜井　美雄（日体大2年・178）
菊池　悟（早大2年・186）
上村　茂（中大2年・178）
菅野　肇（日体大1年・179）
村田　幸男（法大1年・176）
藤本　康生（中大1年・170）
大熊　昌己（中大1年・177）
蒲生　晴明（中大付高3年・189）
佐藤　恭政（中大付高3年・178）
大島　隆志（下関中央工3年・178）
梅林　広（清水市商3年・179）
関　仲三（笠間高3年・182）

▼中学生の氏名は後日発表
▼右側の数字は身長(cm)＝本誌調べ

来年度も現行どおり 千葉国体

日本協会は11月の月例常務理事会で来年度の国体（千葉県佐原市）の参加チーム数について協議、すべて現行どおりにすえおいた。

来年度から沖縄県が九州ブロックに入り8県となるため同ブロックの一般男子の増加（現在3）が議題となったが、50年度の改訂まで大きな変更をさけるという荒川理事長の方針が全国理事会などで打ち出されていることと、一般男子登録が九州8県のうち6県16チーム（47年5月末現在）なことなどから見送られたもの。

中国を正式承認 JOC

【速報】日本オリンピック委員会（JOC）総会＝荒川理事長出席＝は11月22日東京・岸記念体育会館で開かれ、中国問題に関するJOCの態度を協議、「中国を代表する唯一の正統政府は中華人民共和国政府である」「JOCは日中スポーツ交流の活発化を希望、もし各競技団体の所属する国際連盟のルールがその障害となる場合は、それを取り除く努力を払うよう関係競技団体に切望する」などの5項目を承認した。日本協会の国際路線にも大きな影響を及ぼそう。

〃〃〃〃〃 林副会長に勲2等 〃〃〃〃〃

日本協会・林達夫副会長（70才大同製鋼副社長、全日本実連会長愛知協会会長）は特殊鋼技術開発に対する功績でこのほど勲二等旭日重光章を受けられた。

釜山旅客自動車勝ち星なし

第2回日韓男子社会人交流

第2回日韓親善男子社会人交流大会は、韓国から初の男子社会人・釜山旅客自動車（李康竜団長ら16人）を招いて11月17日から25日まで5試合を行った。

釜山旅客自動車は今秋行われた韓国体育大会一般男子優勝チームで、昨夏の日韓高校交流に来日した東亜高の若手OBを中心に張り切った攻守をみせたが、日本側も鹿児島国体優勝の湧永薬品（大阪）ら実業団のトップチームが力いっぱいに迎えうち、結局釜山旅客自動車の成績は5敗に終った。これで日韓男子社会人交流の通算成績（10戦）は日本側の8勝2敗。

湧永、一方的に押しまくる

第1戦・湧永薬品（大阪）との試合は11月17日午後6時から大阪市中央体育館で行われた。審判=光島磯雄、山本孝夫。

湧永薬品 28（11−6、17−8）14 釜山旅客自動車

得	【湧永】		【釜山】		得
0	今井	GK	姜正炫	.178	0
		GK	張裕文	.179	0
3	市原	FP	金広錫	.174	0
6	木野	FP	朴泳甲	.175	0
5	早川	FP	康忠根	.178	2
1	森	FP	金奉謙	.172	2
6	高橋	FP	金甲経	.170	0
2	戸田	FP	李正陽	.172	5
0	松井	FP	金名顕	.182	1
2	藤井	FP	曺基植	.170	0
0	菅	FP	金相魯	.173	0
3	田中	FP	黄鐘秀	.174	0
0	杉野	FP	李正魯	.171	4

24（4）7MT（1）14

（韓国選手横の数字は身長・cm）

○……釜山にはこれまで来日した韓国チームのような鋭さがみられず、湧永は立ちあがりから速攻、遅攻で一方的に押しまくった。

釜山は後半速攻1回とセット1回を正面から決めたのとサイド深くからのトス・シュートに技巧を感じさせたに留った。（光島）

本田技研も大勝

第2戦・本田技研（三重）との試合は18日午後4時から四日市市体育館で行われた。審判=赤松英男、金沢淑郎。

本田技研 23（10−4、13−7）11 釜山旅客自動車

得	【本田】		【釜山】	得
0	戸田	GK	姜正炫	0
0	加藤勇	GK	張裕文	0
1	勝田	FP	李正魯	2
6	佐藤	FP	金広錫	0
0	星野	FP	朴泳甲	1
6	新実	FP	康忠根	1
3	末岡	FP	李正陽	5
2	林	FP	金名顕	2
1	岩本	FP	曺基植	0
1	宮川	FP	金奉謙	0
3	三浦	FP	金相魯	0
0	加藤玉	FP	金甲経	0

23（1）7MT（1）11

○……本田は立ちあがり動きが固く、一方釜山もスカイプレーのタイミングが悪くラインクロスとなり共に10分間無得点。本田は15分すぎからようやくリズムにのり20分5−1と優位に立った。

後半も本田は好調に加点、特に25分18−11から一気に5点をつみ重ねた攻撃力は目をみはらされた。釜山もよく走り、点差の割に面白いゲームだった。（金沢）

新日鉄、辛くも振り切る

第3戦・新日本製鉄名古屋（愛知）との試合は22日午後5時から東海市・新日鉄体育館で行われた。審判員=稲石三二、奥村方志。

新日本製鉄名古屋 16（8−8、8−7）15 釜山旅客自動車

得	【日鉄】		【釜山】	得
0	横江	GK	姜正炫	0
0	高木	GK	張裕文	0
1	鏡味	FP	金広易	0
4	細川	FP	朴泳甲	2
2	小野	FP	康忠根	1
1	石川	FP	金奉謙	2
0	権藤	FP	金甲経	2
4	伊藤	FP	李正陽	2
0	鮫島	FP	金名顕	5
1	渡辺	FP	曺基植	0
3	日光	FP	李正魯	1
0	安達	FP	金相魯	0

16（1）7MT（2）15

○……釜山は3戦目で初の先制点をあげ、動きの鈍い相手ディフェンスをゆさぶり13分には5−2とリード。

新日鉄も15分を過ぎてからシュートが決まりだし18分6−6、伊藤の巧技がつづいて28分8−6とした。釜山は金(名)の強肩で前半8−8に追いついたものの後半は15分12−9、20分14−11と新日鉄のペース。粘る釜山は23分1点差に反撃、新日鉄も苦しくなったが27分細川が貴重なシュートを決め2点差。この加点のおかげで最後の1分間1点とり2点失うという危ない場面も切り抜けることができた。（宮永 劭）

釜山、前半のリード空し

第4戦・セントラル自動車（神奈川）との試合は23日午後7時から横浜市・平沼記念体育館で行われた。審判員=佐分正典、森川利昭。

セントラル自動車 10（3−4、7−4）8 釜山旅客自動車

得	【セ自】		【釜山】	得
0	古賀幸	GK	張裕文	0
0	片桐	GK	姜正炫	0
4	羽毛田	FP	李正魯	1
0	加藤	FP	李正陽	0
1	渡辺	FP	金奉謙	1
0	吉沢	FP	金甲経	2
1	古賀政	FP	金名顕	4
0	真木	FP	金相魯	0
4	布施	FP	金広錫	0
0	岩本	FP	曺基植	0
0	中村	FP	朴泳甲	0
0	阪東	FP	康忠根	0

10（2）7MT（2）8

○……序盤は両チームとも固くなり、先制点は14分になってやっと釜山があげた。セントラルも20分すぎから活発な動きをみせ25分3−3と白熱。釜山は26分金(奉)のゲットで優位に立ち、後半も金(名)のロングなどで15分まで1点差をキープした。セントラルは18分古賀、20分布施で逆転、釜山も27分金(甲)で6度目のタイ（8−8）。しかしセントラルは羽毛田の好配球から28分渡辺、29分布施が得点し辛くも振り切った。（佐分）

三景、巧みにゆさぶる

第5戦（最終戦）・三景（東京）との試合は25日午後7時から東京体育館で行われた。審判員=佐野和夫、岡前義春

三景 19（11−4、8−4）8 釜山旅客自動車

得	【三景】		【釜山】	得
0	西牧	GK	姜正炫	0
0	小林	GK	張裕文	0
4	喜田	FP	朴泳甲	2
5	高梨	FP	金名顕	3
2	内藤	FP	金甲経	2
4	植田	FP	康忠根	0
1	上平	FP	李正魯	1
3	山原	FP	曺基植	0
0	池崎	FP	金奉謙	0
0	大井	FP	金広錫	0
0	高森	FP	黄鐘秀	0
		FP	金相魯	0

19（1）7MT（1）8

○……三景は8分内藤のミドルを口火に高梨（全日本）、植田、上平らがすばやい攻撃を仕掛けて釜山を圧倒、20分9−2と開いてあっさり勝負のサキをのぞかせてしまった。

釜山は三景ディフェンスを崩すだけのスピードがなく金(名)の長身を利したロングと、金(甲)のスカイプレーによるゲットで散発的に得点を返しただけ。韓国チーム特有の粘りのある攻撃や当りの強い守備も見られず、内藤−高梨のコンビ攻撃と喜田のロングを使い分ける三景の攻撃にゆさぶられ放しだった。

（杉山 茂）

整理が必要な国体参加規程（日本協会）

複雑すぎる国体資格

鹿児島国体一般男子における〝無資格選手問題〟（本誌前号詳報）は、その後も関係者のあいだで反響をよんでいる。

それというのも、現行の国体参加資格は厳しいうえに、いささか複雑すぎるからだ。

国体規程が厳格なのは年毎に県から県へ渡り歩くいわゆるジプシー選手を防止するためで、もともと関係者・競技者側の良心の薄さが起因したのだから今さら悔やんでも仕方がないのだが、その規程がやや・・・こしいのはたしかに一考を要すべきだろう。

国体に参加するには、まず日本体協、文部省、開催県などが定める「総則」のうち「参加資格・10項目」の規制をうけ、さらにその一部については競技団体が独自の制限を加えられるようになっている。

例えば「参加資格(9)のアの(ウ)」によれば「一般の部には単一大学または内容が単一大学の学生メンバーになるチームは参加できない」とだけ記されているが、日本ハンドボール協会はさらに「ハンドボール競技・参加資格の(3)」及び「同(4)」で「一般男子に学生の参加は認めない」「一般女子にあっては一チーム3名以内に限り学生の参加を認める」としぼりこんでいる。

それだけではない。今年の場合3月15日の公文書で各都道府県協会理事長に対し「学生とは学連登録者を指すのではなく大学生という『身分』を有する総ての者を指す」などの通達を出しているのだ。マネージャー泣かせの大会である。

このほか、日本協会は「前年度地域予選出場者とは県予選も含めてと解釈する」と明記しているしこの大会だけ「1チームの構成を11名」という変則が採用されている。

微妙なニュアンス

規制がきびしくなればなるほど僅かな字句のニュアンスが微妙な作用をする。

日本体協などは東北、関東などブロックを「地区」と書いているがハンドボール界で「地区」といえば47都道府県を指すというのが長年の慣行、ブロックは「地域」と呼んでいる。このため「地区予選会」といった言葉が時には混乱を招く一因となる。

鹿児島国体での事態も一部の人たちが「特に定められる者のほか都道府県予選(地区予選会を含む)を通過した者であること」（総則・参加資格の⑹）の「者」という字句を、団体競技の場合は「チーム」であると解釈していたからだといわれる。

実際は、この「者」はチームにも選手にも適用させるというのが日本協会の見解で、これまでもその線で来ていたため「無資格」が判定されたのである。

「申しこみ後の選手の交替は特別な事情でない限り認めない」（総則・参加申込の(1)のカ）の「特別な事情」とはどの範囲までか、との問合せも毎年10件近く事務局に寄せられる。荒川理事長は「大会直前亡くなられたか日本協会の要請で外国遠征した選手に代えて、といったケースぐらいではないか」と云う。

エントリーの幅

国体だけチーム構成が11名（GK2、FP9）というのもトラブルの種を蒔きやすい。

「本大会が11名なのだから予選も11名が当然」とする意見は強いがいぜん12名以上で予選を行っているブロックもある。杉山常務理事（総務企画）は「予選はできることなら11名以上でやれないものか。どうしても予選を11名にしぼるならその他に1〜4名の名儀登録だけを認める、というシステムを考えてみたい。そうすれば鹿児島国体のような不運なできごとは救える」といっている。

なお、1チーム11名を12名に戻すためには、現在の5部門計72チームを66チームに減らさなければならない。これは参加選手数を792名に規定されているからで66チーム案には反対が多く当分の間改訂の機運はないといってよいだろう。

50年から大幅に改訂

今後の国体

昭和50年の第30回大会（三重県で開催、ハンドボールは四日市市）から、19才を境に成年男女、少年男女の4部門に改正されることが確定的だ。この4部門をさらに年令別に細分することもできる。成年に教員の部を設けてもよいなどと伝えられるが詳かではない。

参加人員（総数）も、開催県の事情によって一万六千五百、一万四千五百、一万二千五百の三つのうちの一つを選べる、とされるようで各競技はその都度〝巾〟が動くことになりそう。

ハンドボール界でも、一般（成年）をクラブに開放しようといった意見も出ており、そのほか国体いっさいについて普及部が近く再点検をすることにしている。

いずれにせよ3年後の国体はかなり様相を変えているハズだ。

合繊糸・合繊混紡糸

田村紡績株式会社

社長 田　村　正　衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 0593—65—2156（代表）
郵便番号　512

男子　実業団3強に充実の学生勢

大洋デパートがいぜん中心　女子

6日から全日本総合選手権（東京体育館）

今年度のチャンピオンチームを決める第24回全日本総合選手権はファン注目のうちに12月6日から12日まで東京体育館に国内最上位の男子16、女子11チームが参加して開かれる。

男女とも予選トーナメントのあと男子は4、女子は3チームによる決勝リーグで選手権を争う。有力チームや大会のみどころを探ってみた。

〃優勝〃狙う実力派8チーム

◆男子　今年は実業団選手権（9月・名古屋）も学生選手権（11月・大阪）も荒れ模様だった。教員界も実力伯仲、そのムードがこの大会へも持ちこまれそうである。

決勝リーグに進出が固いとみられるのは前年優勝の大崎電気（埼玉）だけ。

学生ナンバー・ワンの日体大(東京)には中大(東京)が、国体一般1位の湧永薬品(大阪)には本田技研(三重)が立ちはだかり、実業団チャンピオン大同製鋼(愛知)も緒戦で法大(東京)、つづいて教職員優勝の大阪イーグルスと苦しい道のりだ。

この8チームはどこも優勝を狙える実力がある。

大崎は近森、飯田、GK下里のオリンピックトリオに東、荒井の両全日本選手、沢田、林（全日本ジュニア）簾野らでスキがない。今年はまだ無冠だけに初の3連覇を狙ってこの大会への闘志は期待してよい。

初優勝に意欲を燃やすのは湧永と大同。湧永は木野、早川（ともにオリンピック代表）を軸に森、高橋、戸田、市原と巧者が並ぶ。

大同は中井(オリンピック代表)松原の両新鋭を先頭に野田（オリンピック代表）、藤中（全日本）、加藤、GK柳川兄（全日本ジュニア）らが揃う。国体の登録問題によるつまずきがいっそう闘志をかきたてさせる因になり、たいへんな意気込みである。

元気な日体ら学生勢

学生勢も元気。特に日体、法大中大の〃三強〃の試合ぶりは注目に価する。

日体は関東学生（10月）の低調からすっかり立ちなおり松岡、浅原(ともに全日本)、小林らの速攻は参加チーム随一とみたい。

法大のまとまりも買える。長谷川、田上、井手、村田（全日本ジュニア）、太田、GK柴田(全日本ジュニア）ら攻守のバランスがいい。中大は全日本学生で大経大(大阪)に不覚をとり、辛くも開催地代表として出て来た。しかし佐々木(オリンピック代表)、白石、田中らの巧技は実業団に伍す力がある。花輪(全日本)の負傷回復が遅れると苦しいがベストメンバーで日体と顔を合せるようだとすさまじい内容になりそうだ。

教員界の両雄・大阪イーグルスとスワロー兵庫は勤務先を異にしながらみごとな結束でつねに気力充実の試合をみせる。優勝をめざす実業団、学生にとっても無気味な存在となろう。大阪は樫塚、高橋、福井、池本、GK本田（オリンピック代表）、スワローはベテラン北山が健在のほか黒田、井上中村、畑、木野、GK上野らが並ぶ。

最大のダークホースといわれるのは本田技研(三重)。新実（オリンピック代表）、佐藤（全日本）、勝田、末岡、星野、GK戸田らで攻守ともいちだんと迫力を増した。得点力は高いだけに守備面の粘りが一つのカギといえる。

3年連続して大崎×湧永?

決勝進出のビッグフォアをあえて選べば大崎、湧永、大同それに日体×中大の勝者。実業団3強に学生が第15回（昭38）の立大以来9年ぶりに優勝をかけて挑戦する展開となろう。

この角逐を占うことは振り出すさいの目をすべて当てるに等しい難しさだ。

大崎×湧永という3年連続の争いを本命にすれば、大同が波にのって一気にタイトルをさらうケースが対抗。学生が優勝を望めるのは日体がスピードと体力にまかして押しこむ時だけチャンスが生まれると思う。ここまで絞り切ると中大はスケールという点で一歩の遅れをとるのではないか。

いずれにせよ4強の実力は文字どおり紙一重、星をつぶしあって得失点差の争いになる公算も充分にある。

悔れぬ三景らの実力

このほかのチームももちろん悔れぬ実力がある。特に全日本学生での活躍が生々しい大経大、ここ一番に強い三景(東京)と同志社大(京都)、自衛隊1位の名にかけても、という鹿屋第一航空群（鹿児島）のファイトは軽視できまい。

三景×大経大は1回戦屈指の好カードだし、同志社大が本田技研にどう食い下るかも興味深い。

特に高梨(全日本)、内藤、植田喜田らによる三景のソツのない試合運びは優勝戦線に顔を出してもおかしくないだけのものがある。

話題の中大付高と両クラブ

話題を集めているのは中大付属高(東京)。今夏の全日本高校で圧倒的な力を示した。今回も自信にあふれたエントリーだったが、いきなり大崎というクジ運はあまりにも惜しい。抽せん会（11月20日・東京）でも思わず嘆声がもれたが次代のホープ・蒲生（全日本ジュニア）を中心に張り切った攻守をみせてくれるだろう。高校男子の出場は第16回(昭39)の仙台一高(宮城・東北代表)、加納高（岐阜・開催地代表）以来のこと。

全国各クラブの声援を背にうける三春台ク(神奈川)と蒲郡ク（愛

知）の登場もうれしい。ともにその情熱は定評がある。

三春台クは第6回（昭29）以来18年ぶりの出場、蒲郡クは桜丘会、清商クら東海の名門を押しのけての初出場と対照的。

蒲郡クは第1戦で湧永に当たるのはつらいが、三春台クは植木、大山、尾島、武藤らの攻撃力に自信をもっておりGK馬淵（全日本）が本調子だとイーグルスも楽観は許せまい。

モントリオールへつながると伝えられる世界男子まであと14ケ月新しい全日本の編成を迫られている斯界にとってこの大会のもつ意義は大きく、高度な内容の激戦を展じて期待に応えて欲しい。

（杉山　茂）

田村紡どう対抗するか

◆女子　本大会もここ数年の例にもさず、大洋を中心に動くことになろう。それも、学生界がどう実業団に対抗していくかここが焦点となろう。

Aグループからは大洋が決勝リーグに進出することはまず固い。GK小原、FP垂水、島田、米らの不動のメンバーで大会に臨む。これに対抗するのは田村紡であろう。三毛、辻、金田の攻撃力で、大洋の堅陣を崩すことができるかどうか。

美和クでは、早川が相変らず元気。寺尾の加入も大きい。東女体大は西田、木告を中心にして、インカレ以後上り調子で活躍が期待されるが、実業団二強を相手にしてはやや苦しい。今回はクラブ界の出場がすべて辞退でとりやめになったため、美和クが唯一の社会人チームとなった。

重機、ブラザーの争いか

Bグループは大洋に対抗する有力候補・重機、ブラザーが一回戦で対戦する。

重機は牧野、古佐原、村上、市川にGK長岡が元気でムラがなくなっている。

ブラザーも鳥居を中心にして、動きがまとまってきている。動きはよくなっているが、藤浪、金村がいかに動いていくか、このあたりがブラザーとの戦いを決める焦点になろう。まとまりの点からいって、重機がやや有利とみたい。

この対戦の勝者には、日体大がからむ、赤塚、小貫、木村のトリオに嶋田、岩井を加えた攻撃陣は最近の学生界では抜群の力をもってはいるが、これが実業団を相手にどうでるか、一気にペースに乗ればあるいはということもあろう

扇屋は7月の実業団以来の全国大会でどこまで成長しているか。伊藤、桜井を主にした攻撃力はともかくディフェンスのできが課題

予選トーナメント組合せ

【男子】

大崎電気（日本協）
中大付高（高体連）
三景（実連）
大阪経大（学連）

日体大（学連）
スワロー兵庫（教職連）
中央大（東京協）
海上鹿屋（自衛連）

湧永薬品（日本協）
蒲郡ク（社会人西）
同志社大（学連）
本田技研（実連）

大同製鋼（実連）
法政大（学連）
三春台ク（社会人東）
大阪イーグルス（教職連）

【女子】

大洋デパート（実連）
美和ク（東京協）
田村紡（実連）
東京女体大（学連）

日体大（学連）
扇屋（次年国体）
東京重機（実連）
ブラザー工業（日本協）

日本ビクター（日本協）
大崎電気（実連）
東京教大（学連）

・日本協は前年度優秀チーム
・東京協は開催地代表
・今回はNHKTV中継なし

ビクターがぬけるか

C組では、いずれも少数の選手しかもっていないチームが珍しくも集った。社会人代表の出場辞退によって、昨年優勝の日本ビクターがシードされ、一回戦は対戦しない。

ここでは、やはり日本ビクターがやや抜けている。蓮見姉が健在であるし、八重樫、山口、高野、谷沢も育ってきているし、GK渡辺も安定してきている。

大崎もGK和田、FP長谷川、新島、岩井、佐藤でまとまってはきているが、ビクターに対抗するのは苦しいようである。

東京教育大は第一戦は7人で戦わざるを得ない状況である。岡田畑中を中心にしたチームでどこまでやれるか、インカレ時負傷の秋山のケガが直らないと苦しい。

大洋にビクター、重機がどこまで迫るか

順当にいけば、大洋、重機、ビクターが決勝リーグで顔を合わせよう。この両チームの最近の対戦成績はいずれも大洋に二連敗してはいるが重機7－10、10－13、ビクター10－12、7－13とかなり差をつめてはきているが、今一歩のところで及ばない。やはり今回も大洋が優勝候補一番手だ。

（藤本　強）

蒲郡クと三春台ク
全国社会人代表決まる

全日本総合選手権に出場する全国社会人西地区代表決定戦東海クラブ1位・蒲郡ク（愛知）×近畿クラブ1位・京都クの試合は11月19日名古屋のブラザー工業体育館で行われ蒲郡クが勝ち代表に決まった。

蒲郡ク（東海）14（10－7, 4－5）12 京都ク（近畿）

◇

同東地区代表決定戦は関東クラブ1位・三春台ク（神奈川）と北海道クラブ1位・函館有斗OBの間で行われる予定だったが函館有斗OBが辞退したため三春台クが自動的に代表権を得た。

女子社会人は辞退

全日本総合選手権に女子の全国社会人代表として出場する1チームは日本協会が鹿児島国体に出場の5クラブ（鹿児島ク、徳山OG大谷ク、新居浜ク、高岡女ク）を第1候補に、ブロッククラブの勝者（小平OG、清商ク、佐賀ク）を第2候補に推せんしたが8クラブとも辞退（または未回答）のため今回は代表の推せんをとりやめた。

この結果本大会の参加は11チームとなり日本ビクター（前年優勝）を1回戦不戦扱いにした。

ミュンヘンレポート②

今後の課題

オリンピックチームコーチ　竹野奉昭

ミュンヘンオリンピックでハンドボールが7人制としては初めて実施種目になり、日本ハンドボール界の精鋭を集めて、合宿、遠征国内に於ける外国チームとの対戦を通して、強化に努めてきた。これらのものが果して最善であったがどうか、今後の課題を含めて見ておきたい。

世界のハンドボール界は西欧から北欧へ、そして更に東欧へと最強国は推移している。この大会では、はっきりと東欧の全盛時代が確立されたといってよい。

一位のユーゴにはじまり、チェコ、ルーマニア、ドイツ民主主義共和国、ソビエトと1～5位までを東欧圏が独占し、改めて大会が開かれても、その順位に変動こそあれ、北欧、西欧、他大陸のつけこむスキは当分望めそうもない。

ハンドボールは組織のスポーツとも言える。共産圏のスポーツ行政に例を見るような体制でなければ、世界のトップレベルの強化と技術の開発はありえないのではないかと一種の不安を感じる。

東欧と西欧のナショナルの差

東欧圏のナショナルチームはスポーツ行政の特色をもって育てられたチームであり、恵まれたスポーツ環境によって初めて可能なチームである。

西欧圏はハンドボールの愛好者の中から天才的選手を集めて、訓練し、その時々でナショナルチームを編成してきている。それが技及ばず格段の力倆差でもって破れるのであるから、それにも及ばぬ我が国では、長期的展望をもって計画をたてていかなければならない。

どうしても必要な長期合宿

現在の日本のハンドボール環境で前述の東欧勢に対抗するためには、長期的合宿生活を送らない限り無理なように思う。昭和44年に2ケ月にわたってヨーロッパ遠征強化合宿が日本ナショナルチームの技術向上の上に多大なプラスになっていることがこのことを実証していると思う。

日本のハンドボールはどうかと言えば、西欧、北欧圏の技術・戦術が自分達に近いと評価していたが、もはやそれらの国の技術は東欧圏の技と力をミックスした堅城はとても破れないことが今回で明確になった。

東欧圏の最上位国のハンドボールは恵まれた環境のなかで育った厚い選手層の中から、体力、技術戦術にすぐれた選手による多彩な力の攻撃、それに技を生かした巧技が加えられている。それにまた一人一人の選手の個性をとことん引き出し、力強く育てている。

シュートにしても必ず得点するのだという執念がうかがえる。一方北欧・西欧圏では、技術を重視しすぎるあまり、一人二人のポイントゲッターに得点をまかせるというチーム構成がとられている。

こうした中にあって、日本がヨーロッパ、特に東欧の壁を破るにはどうすればよいかが問題である。国際的には、地理的に恵まれないわが国が国際試合のキャリア不足をいかにして解消するかが最大の問題である。

それには、まずヨーロッパ諸国の動向を常につかんでおくことが必要である。

ナショナルチームの遠征と招待の定例化とこの対戦は上位チームに限るべきである。このことは、ヨーロッパとの交流を常に絶やさぬことと同時にアジアに多くの好敵手の生れることも必要である。たとえば日韓ナショナルの対戦がせりあいになれば、国際試合のすざましさを身体で体験できる日本が中心になってアジアのレベルアップをはかることもかかせない。

これらのためには、やはりどうしても長期の計画的合宿が必要になってこよう。

頂点形化と底辺拡大は 車の両輪

頂点強化と底辺拡大は車の両輪の役目を果すと考えねばならない底辺を拡大することによって、ハンドボールファンを増やすとともに、全国の指導者が一貫した指導体系のもとに、優秀な長身プレーヤーを発掘し、ナショナルチームに送りこむ。このような選手によって、頂点は強化され、底辺拡大に拍車をかける。このように車の両輪の役目をもった二つの基本的施策がどうしても必要となる。この二つの基本施策は一体化して行なわなくてはならない。

ナショナルチームを複数化することも必要である。この二つ以上のナショナルチーム間で常に入替えをし、たくましく大きな選手に育て、大きなゲームで実力を完全に出しきれる心、技、体の三拍子

の揃った選手にしていかなければならない。

コーチングスタッフの確立

ナショナルチームのコーチングスタッフの確立。ナショナルチームは常に一貫した指導を受けられるようにコーチングスタッフを確立するとともに、トップチームのコーチングスタッフと常に連絡をしていくことも必要となろう。

また各国で開催されているハンドボールスクールにも多くの人々が参加し、常に世界のハンドボールのトップレベルの推移を知り、それを国内の技術講習会で末端まで徹底していくことも必要であろう。

これらの技術の研修をできるように各段階に於ける技術指導者の講習、研修をどしどしやっていくことも重要なことである。これらを通して国内各チームのレベルアップもはかれるし、それがナショナルチームの強化につながってこよう。またナショナルチームと各チームのコーチが連絡を密にすることによって、独自の技術の開発、日本の指導体系の一貫化がなしとげられよう。

たとえば、防御では、日本国内ではほとんどのチームが1―5防御をとっているが、相手チームとの関連なしに常にこのシステムをとることの問題点などは掘りさげられていない。

攻撃でもダブルポスト、ロングシューター、サイドの攻撃と各チームの個性が全く生かされていない。一人のゲッターと一人のチャンスメーカーをマークしさえすれば、そこの攻撃はお手あげになってしまう。これが日本のトップチームの現状である。より多くの研究を望みたい。

日本及びユーゴの試合経過時間(10分)別得失点表

	時間	0～10	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	計
予選	日本	3	2	2	1	4	2	14
	ユーゴ	5	2	4	4	3	2	⑳
予選	日本	1	3	3	2	2	1	12
	ハンガリー	4	4	2	2	4	4	⑳
予選	日本	2	4	3	5	1	5	⑳
	アメリカ	4	0	5	0	3	4	16
順位	日本	3	3	3	0	3	5	17
	ノルウェー	3	3	2	6	3	2	⑲
11位	日本	3	5	3	3	1	4	⑲
	アイスランド	4	3	5	2	2	2	18
予選	ユーゴ	5	3	3	7	2	5	㉕
	アメリカ	3	3	3	2	4	0	15
予選	ユーゴ	4	2	3	4	3	2	⑱
	ハンガリー	2	2	4	3	2	3	16
準決	ユーゴ	5	4	5	2	3	5	㉔
	西ドイツ	3	2	2	1	4	3	15
準決	ユーゴ	0	3	2	2	4	3	⑭
	ルーマニア	0	3	1	4	2	3	13
決勝	ユーゴ	4	3	5	2	4	3	㉑
	チェコ	1	1	3	2	2	7	16

(本誌調べ)

審判の世界との交流を

次に審判の問題がある。国際ルールで日本の審判が笛を吹いていることには変りはないが、細かいニュアンスの点になるとやはりかなりの差を認めざるを得ない。これが技術の向上を阻んでいる感がある。

国際審判講習会に出席することも必要であろうが、やはり生の試合を多く見てもらうことが必要であろう。それが得られない場合には、フィルムなどの動く資料を利用してもらうことであろう。

試合は2名の審判員と対戦チームの選手によって進行される。選手はルールに従ってプレーする。審判はその行為がルールに反した場合に判定を下すことによって、競技が行なわれる。現状では、時として、審判がゲームをやり、選手が判定していることが見られる。

審判は確信をもって笛を吹いていると信じるか、選手がそれに対して不平を言い、不満な顔をする場合、断固たる処置をとってほしい。審判はそれだけの自信とプライドをもって笛を吹いてほしい。自信とプライドをもった吹笛こそ審判の任務であろう。それには、世界選手権などの大会はもちろんのこと、遠征には必ず一組の審判員が帯同すべきであろう。

以上多くの課題をのべてきた。もう一度まとめておくと、

1　世界上位チームとの多くの交流と長期合宿
2　日本独自の技術・戦術の開発
3　協会が底辺拡大と頂点強化の二大施策をそれぞれの現状で最大の努力をし、ナショナルチームを育てあげる。
4　審判技術の国際化

ということになろう。やはり、世界をめざすためには、長期の見通しをたて、一歩一歩それに近づいていくより仕方がない。

全国のハンドボール愛好者が完全に足並を揃えて、これらの条件を一つ一つ克服して、取りくんでいかなくてはならない。

日体、法政の宿願くじく 男子

～第15回全日本学生選手権～

女子も日体　中央、大経大に敗れる（準々決勝）

第15回（女子第8回）全日本学生選手権は11月13日から17日までの5日間大阪市中央体育館に各地域学連から推せんの男子32、女子12校が参加してトーナメントで行われた。

男子は優勝候補一番手にあげられていた中央（関東）が準々決勝で大阪経大（関東）の気力にあふれた攻守に完敗する大波乱がおき、ベストフォアは8年ぶりで東西の強豪2校ずつの勝ち残りとなって大会を大いに盛りあげた。

決勝は5連覇を狙う日体と初優勝に燃える法政の関東同士の争いから日体が終始優勢に試合を進めて優勝。

女子は有力とみられた日体（関東）が危気ない試合ぶりで進出、4年連続東京女体大（関東）との顔合せによる決勝も鮮やかな速攻で大勝、3連勝通算6度目の優勝を決めた。日体の男女優勝は3年連続4度目である。

大体大（関西1位）1回戦で敗退

男子

名城、法政に善戦
愛知教大、東京教大降す

▽1回戦

		前半	後半		
日体（関東）	29	18−6	11−1	7	福井大（北信越）
中京（東海）	24	16−1	8−2	3	立教（関東）
明治（関東）	23	14−11	9−6	17	東北学院（東北）
京都産大（関西）	23	13−4	10−3	7	福岡大（九州）
同志社（関西）	19	8−3	11−5	8	東京学芸大（関東）
法政（関東）	17	10−8	7−6	14	名城（東海）
日大（関東）	21	13−6	8−8	14	近畿大（関西）
関大（関西）	23	13−4	10−5	9	福島大（東北）
防衛（関東）	23	10−9	13−7	16	金沢工大（北信越）
松山商大（中四国）	15	9−7	6−5	12	福岡教大（九州）
九州産大（九州）	22	10−9	12−3	12	山口大（中四国）
大阪経大（関西）	36	19−8	17−4	12	岐阜大（東海）
愛知教大（東海）	18	9−8	9−7	15	東京教大（関東）
早稲田（関東）	15	9−6	6−5	11	大阪体大（関西）
中央（関東）	39	20−3	19−2	5	北海道大（東・北）
芝浦工大（関東）	25	15−5	10−7	12	京大（関西）

○……優勝戦線の一角・早稲田×大体大は早稲田が前、後半いちどづつみせた連続3ゴールを活かして関西1位の大体大を制した。

前半はたがいに決定的なチャンスをつかめず、わずかに早稲田が2−3の劣勢から3点をつづけさまに奪って22分5−3と逆転したのが見所だった。

後半に入ると様相が変わり激しい得点の入れ合いになった。

大体大は2分中村で6−6としたが、早稲田は6分から9分までの間に渡辺の2点と加藤で9−6と引きはなし、結果的にはこのたたみかけが勝因となった。

そのあとは大体大が取っては早稲田が返す展開で15分11−9、20分12−10、25分13−11と流れ、早稲田は26分加藤、27分川畑でダメを押した。

○……内容、点差とももつれ1回戦最大の波乱となりかけたのは法政×名城。法政は10分までに4−0と順調にリードを奪ったが、名城は飼沼の巧技と7MTなどを活かして22分には逆転に成功した。

法政は後半開始直後もちなおし10分11−7と今度こそ主導権を握ったかにみえたが、粘る名城は11分以後4分間に4ゴールしてタイにするみごとな試合ぶりでスタンドをわかせた。

一進一退のあと法政は18分15−14から2点を加えて辛くも振り切った。名城は後半追いついたあと先行できなかったのが惜しまれるが、その健闘は大いに賞されてよいだろう。

○……愛知教大が東京教大を破った。20分すぎまでは互角に進んだが愛知は23分有岡、24分田中で2点の優位に立ったのが大きく、さらに後半立ちあがり有岡が連続ゴール11−7としたのも巧かった。東京はつねに相手を射程内におきながら一気に攻めこめずずるずると押し切られた。

松山商大×福岡教大は、松山が

5－5から前半26分大山で得た貴重な勝ちこし点を後半巧くつなぎ25分14－9とふくらませ制勝。

日大×近大は前半近大が2－7から一気に8－7と逆転するかと思えば、後半は日大が8－9から連続6ゴールする波の多い試合、日大の力勝ちだった。

このほか防衛大が前半、山本の活躍などで北信越1位の金沢工大を降したのと京都産大のまとまりが目立った。名門立教は中京に完全に封じこまれて1回戦の最少得点にとどまりコートサイドをなげかせた。

中央、早稲田を振り切る

京産大、明治に制勝

		前半	後半		
日体	15	7－5	8－6	11	中京
京都産大	12	3－7	9－1	8	明治
法政	24	12－9	12－6	15	日大
関大	16	9－7	7－8	15	防衛
同志社	17	9－7	8－5	12	九州産大
大阪経大	23	13－8	10－3	11	松山商大
芝浦工大	20	14－9	6－4	13	愛知教大
中央	18	8－10	10－5	15	早稲田

○……関東同士の対戦にもかかわらずファンを呼びこんだのは中央×早稲田。

中央は佐々木（オリンピック代表）の再三にわたる好プレーでたえず先手をとり前半16分と後半7分の二度4点差をつけた。

早稲田は前半なかばから負傷（右ひざねんざ）している巨砲・菊池を送りこんで反撃に転じ20分4－5、後半11分12－13と粘ったがいずれもそのあと佐々木にシュートを決められて同点とすることができなかった。

早稲田にとって惜しまれるのは試合開始後15分近く攻防両面で動きが鈍く相手を完全に調子づかせてしまったことだ。

逆に中央は先制に成功してすっかり落ち着き点差を詰められても余裕があった。

○……日体×中京は日体が7分から18分までに6点をもぎとって7－2とした時は一方的になるかとみえたが、中京はひるまず4点を返して6－7。ハーフタイム寸前の失点も後半すぐ返して球趣を盛りあげた。

しかし、試合巧者の日体はいったんつかんだ優位ははなさず相手ディフェンスをゆさぶっては小刻みに加点した。ところが守備面で確実味がなく12－8のリードも5分足らずで2点差に追いあげられさらに松岡（全日本）の退場（2分間）というピンチを招いた。中京はここで攻め急ぎかえって小林の俊敏なプレーに得点を奪われ13－10、14－10とされたのは拙かった。動きの早い好試合といえたが両校にしてみれば必しも満足のゆく内容ではなかったのではなかろうか。

○……関西勢4校が揃って駒を進めた。特に上り坂の京都産大が明治に先制勝ちしたのはあざやかである。

京都は立ちあがり動きの鈍い明治を押しまくり20分7－0という快攻。明治は後半やっと攻撃がまとまり、デイフェンスも立ち直って20分には7－10としたのだが京都は荒てず24分戸田、26分垣内で12－7と引きはなした。

同志社×九州産大は同志社が1－4の劣勢をはね返し前半20分以降は完全にマイペース、後半いちど8－9と追われたが土田、松井の活躍で5分後には14－8とした大阪経大×松山商大もせりあったのは前半15分4－3まで大経大はそのあと連続6ゲットして優位に立った。

苦しんだのは関大。体力のある防衛に2－5から一気に逆転され後半もたえず先手をとられたのだが、20分12－12とタイにしたあと内田の連続3ゴールで15－12、一息ついた。最後まで粘る防衛は26分13－16とはなされながら2点をあげたが及ばなかった。敗れたとはいえ九州産大、松山商大、防衛の試合ぶりは好感のもてるものであった。

○……芝工大は終盤疲れのみえた愛教大をようやく攻めこんで大差をつけたもののそれまでは3点とあかぬせり合いで、立ち直りつつあるとはいうものの昔日の面影にはほど遠かった。

この結果、ベスト8は東西各4となった。関西勢が4校も勝ち残ったのは史上初めて。

また、地方勢がすべて姿を消してしまったのは2年ぶり7度目のこと。

同志社、芝浦工大を破る

法政、日体は順当勝ち

▽準々決勝

日体 16（8－6　8－3）9 京都産大

【京産】	得		【日体】	得
日比	0	GK	斉藤	0
東口	0	GK	奥川	0
垣内	2	FP	松岡	3
戸田	0	FP	浅原	6
福井	4	FP	藤田	1
滝本	0	FP	古沢	1
大原	2	FP	小林	4
富田	0	FP	高野	0
天本	1	FP	河先	1
岩原	0	FP	細江	0
島	0	FP	福井	0
荻野	0	FP	喜井	0
	9	（1）7MT（1）		16

（審・新村、東）

○……京産大のプレーには堅さがみられ、パスミス、シュートミスが多くしばしばチャンスを逃した

これに対し日体はGKの好守もありパスワークも多彩で前半13分2－2から着実にゲット、28分には8－2と優位に立ち、後半も15分までに5ゲットして完勝した。

しかし終盤近く攻防両面で雑なプレーがみえたのはほめられない。最後まで変わらぬペースを守り切るべきだろう。（幸田末之）

同志社 15（5—4 10—5）9 芝浦工大

【芝浦】	得		【同大】	得
吉田	0	GK	高橋	0
黒田	1	FP（審・幸田 栗山）	牧野	3
押切	0		横川	1
斉田	4		中村	0
新井	1		入江	3
安中	0		右田	1
柳沢	1		上田	3
柳原	2		早瀬	1
古川	0		大庭	1
			松井	2
			中川	0
9	(2)	7MT	(0)	15

○……同志社は立ちあがり1—3とリードを奪われたが15分をすぎるあたりからセット攻撃による巧みな変化で芝浦陣を割り牧野、上田がチャンスを確実に活かして逆転後半早々いちどはタイとされたが2分以降1分おきに加点、9分10—5と差をあけた。

芝浦はタテの突進にみるべきものはあったが単調で特に後半は動きのよい同志社ディフェンスを攻めあぐんだ。

同志社は牧野、入江、上田と左腕3枚の使いかたが巧く相手ディフェンスをかく乱するのに大きな効果があった。（荒川清美）

法政 15（7—3 8—7）10 関大

○……法政は気力の充実したプレーとパスワークから速攻を決めて着実に得点を重ね、守っても縦横に動いて関大になかなかチャンス

【関大】	得		【法政】	得
神山	0	GK	佐藤	0
井上	0		柴田	0
横井	1	FP（審・光島 山本）	吉野	0
伊奈	1		田上	0
内田	3		長谷川	3
吉田	2		太田	1
鞘本	0		川島	3
塚木	1		井手	1
平元	2		柳	1
柏木	0		橋本	2
川本	0		村田	4
正木	0			
10	(1)	7MT	(2)	15

を与えなかった。

後半、関大は相手のパスミスに乗じて攻めこんだが15分7—10までがせいいっぱい。法政はポストプレー、ロングなどを使い分けて危気なかった。関大は前半もう少し相手の攻撃をつぶしていれば後半勝機をつかむこともできたろうと惜しまれる。（近藤正行）

大阪経大 15（7—6 8—4）10 中央

【中央】	得		【経大】	得
吉近	0	GK	山田	0
山田	0			
佐々木	4	FP（審・近藤 東）	牛屋	2
白石	1		奥川	3
田中	1		津川	2
山村	2		穂積	3
村田	0		二宮	1
上村	1		橋本	3
今関	0		太田	1
松本	0		石井	0
大熊	1		福井	0
藤本	0		山本	0
10	(1)	7MT	(1)	15

○……大波乱だった。もっとも大経大にしてみれば「この日に焦点をあてて大会へ臨んだ」（試合後山田主将の話）のだから勝算は充分にあったのだろうが、それにしても鮮やかな攻守をみせた。

試合は初めから大経大のペースで穂積の豪快なシュートを気にする中央守備陣が前へ出ると奥川の好リードから牛尾、橋本らがポストプレーを巧みに決め前半19分には右サイドの津川が左45度の穂穂へジャンプ・パスを送りタップして受けた穂積がそのまま射ちこむファインプレーも織りこんだ。

さらに後半開始後6分間に迫力満点の速攻2本を含んで4点を決めた展開もみごとだった。これで6—11、さすがの中央もこたえたハズである。

○……中央は前半20分4—7から田中、上村で1点差とし26分7MTを得たのだが佐々木が失敗。後半11分にも2点差としたがついに追いつけなかった。大経大GK山田の美技に封じこまれたのと、パスミスがわざわいした。

花輪（全日本）が前日の早大戦で左かかとを痛め欠場、佐々木がいつになく動きが鈍かったのも誤算だが、すべての点で大経大が上廻り、今年も「インカレは勝てない」ジンクスを中央は破れなかった。

（杉山 茂・NHK運動部）

法政、巧みに大経大封ず

▽準決勝

法政 13（8—4 5—6）10 大阪経大

○……初優勝めざす法政、前日中央を破った大経大、意気あがる両校の対戦はなかなか見応えがあった。

法政は大経大の攻撃に対して研究のあとがみえ、早目々々のつぶ

【大経】	得		【法政】	得
山田	0	GK	佐藤	0
吉川	0			
牛屋	2	FP（審・光島 山本）	吉野	0
奥川	2		田上	3
山本	0		長谷川裕	3
穂積	2		長谷川富	0
橋本	2		太田	0
津川	1		井手	1
二宮	0		柳	1
太田	1		橋本	3
石井	0		村田	1
福井	0		川島	1
10	(1)	7MT	(3)	13

しが効を奏した。攻めても田上の巧いリードと長谷川裕、井手らがチャンスを確実に活かし、7MT専門の橋本のシュートも冴えた。

大経大は、法政の小刻みな動きに最後までペースをつかむことができず、特に前半は帰陣の遅れもあって法政の速攻を許したのが拙かった。（杉山）

日体、スピードで圧倒

日体 20（10—5 10—6）11 同志社

【同大】	得		【日体】	得
高橋	0	GK	奥川	0
			斉藤	0
牧野	6	FP（審・新村 東）	松岡	3
横川	2		浅原	5
中村	0		藤田	3
入江	0		古沢	0
吉田	2		小林	4
上田	1		喜井	4
早瀬	0		河先	0
大庭	0		福井	0
松井	0		高野	0
中川	0		細江	1
11	(5)	7MT	(1)	20

○……同志社は前半15分過ぎたてつづけに速攻とポストプレーで3点をあげ5—4と逆転したが、日体は20、23分藤田が巧みなカットから一人で持ちこみそのあとも動きの鈍った同志社ディフェンスをゆさぶって加点、ペースを取りも

どした。

このあたりスピード差が出たともいえる。同志社は後半立ちあがり7MTなどで反撃の機会を狙ったが、しだいに疲れがのぞき、終盤は松岡、浅原(全日本)らの力と技にふりまわされてしまった。（杉山）

▽3位決定戦

同志社 13（6−6、7−5）11 大阪経大

日体、初手からリード

日体 17（6−2、11−8）10 法政

得	【日体】		【法政】	得
0	奥川	GK	佐藤	0
0	斉藤	GK	柴田	0
5	松岡	FP	吉野	0
4	浅原		田上	0
2	藤田		長谷川裕	3
4	小林		井手	2
0	細江		柳	0
1	喜井		村田	2
0	古沢		太田	0
1	河先		川島	1
0	福井		長谷川富	0
			橋木	2
17	（1）	7MT	（3）	10

（審・新村、前田）

○……『日体大の五連覇は絶対阻む』—こんな気迫でスタートした法大。しかし日体大の力強い攻撃はあっさり立ち上がりで勝負を決めてしまった。3分小林、4分藤田、6分浅原が速攻等で3点を先取し、前半終了間際にも松岡らが加点して6−2と前半をリードした。後半にも日体大は『5つのフォーメーションを駆使した』(北川監督)の言葉通り、見事なプレーを随所に発揮した。松岡が豪快なジャンプシュートを放つかと思えば、浅原、藤田、小林のコンビプレーと大ワザ、小ワザをうまく使った。

○……法大もよく粘った。後半10分過ぎ井手、川島がポストプレーを決め7−9。会場を沸かせ、まさに決勝にふさわしい雰囲気となった。しかし法大の〝同点〟へのあせりが日体大のペースを取り戻させてしまった。パスミス等に乗じた日体大の底力かもしれないが、松岡のフェイントなどで5点を連取して14−7とあっさり点差を広げてしまった。その後も確実に得点し17−10で見事五連覇を遂げた。

○……日体大の五連覇は立派だが、ライバル中大のふがいなさは何ともいただけない。〝優勝候補〟と騒がれ過ぎたのか、慢心があったのか、準々決勝で大経大のロングシュートに敗退してしまった。それはともかくベスト4に関西勢の同大、大経大が残った健闘が大会をすくった一因のようだった。（小山敏昭・共同通信社（大阪）運動部）

男子優勝の北川日体大監督の話

この大会のタイトルは守り続けるという選手の自信が大きかった。それに10月のリーグ戦終了後この大会目ざして毎日5時間ずつ練習したのもよかった。今年初めての優勝を遂げて本当にうれしい

甲子園、打倒日体成らず

女子

▽1回戦

甲子園短大(関西) 7（3−2、4−3）5 東京学芸大(関東)

日女体大(関東) 9（1−3、8−1）4 大阪薬大(関西)

中京(東海) 10（5−5、5−3）8 武庫川女大(関西)

大阪体大(関西) 15（9−3、6−0）3 中京女(東海)

○……大体大×中京女戦を除いてはそれなりに面白い経過をたどった。

甲子園×東京学芸大は東京が食い下り後半10分までは1点差のせりあい、そのあと走力に優る甲子園が連続2点をあげて6−3としどうにか逃げ切った。

日女体大×大薬大は劣勢の日女体が後半10分3−3としてから波にのり13分酒井のゲットで逆転、20分には7−3とリードした。大薬大は後半1点に留りこの拙攻がせっかくの優位を活かせなかった。

中京×武庫川は武庫川が序盤に中川、寺尾らの巧技で得点、11分5−2と先行したのだがそのあと後半13分まで1点も加えられず中京の反撃を許した。

中京は後半10分7−5とペースをつかんだかにみえたが14分7−7とされる乱調、16、17分の7MTを宮田が決めてリードを奪えたが薄氷を踏む勝利だった。

武庫川は初出場ながらオーソドックスな攻守で健闘、終盤8−9のあと再三の好機を焦って逃さなければ勝利も望めただろう。

東女体大、中京に逆転勝ち

▽準々決勝

日体(関東) 13（5−3、3−5）8 甲子園短大

得	【日体】		【甲子】	得
0	大工原	GK	上島	0
0	長谷川	GK	田中	0
1	鵜田	FP	宮方	0
2	赤塚		乗正房	2
3	小貫		北川	0
6	木村		継田	2
0	福川		白井	0
1	八木		太田	0
0	岩本		木下	2
0	小林		竹内	0
0	坂本		飛嶋	0
0	鈴木		平田	2
13	（4）	7MT	（1）	8

（審・高倉、槙）

○……東西1位同士の対戦。日体は赤塚、木村を中心にした縦のオフェンスをよく決め最初からリードしつづけた。

甲子園も乗正房(全日本)、GK田中を軸によく守ったが、巧みなショートパスをつなぎながら襲う日体の攻撃をかわし切れなかった。

スコア的には前半17分4−3、後半6分6−4と甲子園には2度タイまたは相手を追い抜くチャンスがあったのだがオフェンスに変化がなく、攻守とも日体が一枚上の試合ぶりを見せた。（前田吉弘）

歴代優勝校

①芝浦工大
②芝浦工大
③芝浦工大
④芝浦工大
⑤芝浦工大
⑥立教
⑦芝浦工大
⑧芝浦工大
⑨芝浦工大
⑩立教
⑪日体
⑫日体
⑬日体
⑭日体
⑮日体

〔女子〕

①日体
②日体
③日体
④日体
⑤東女体大
⑥日体
⑦日体
⑧日体

東京教大(関東) 9（6−2、3−4）6 大阪体大

○……二本の7MTで先制した東教大は前半一方的に試合を進めた。

後半になって大体大も花谷、山本の活躍で反撃18分には6−7まで迫った。しかし東教大は22分7MT(畑中)、24分岡田で再び3点差とし辛勝、岡田の攻守にわたっての巧技が光った。大体大はゴール前あと一歩の鋭さに欠けるのが惜しまれる。（山口吉弘）

大阪教大(関西) 8（3−3、3−3、1−1、1−0）7 日女体大

○……前半は日女体大のスピードと大阪教大の堅実なプレーが好対称、チャンスははるかに日女体大が多かったがノーマーク速攻をパスミスで失ってつぶした。

後半も日女体大が押し気味で10分には6−4と開き追加点がないまま終るかと思われた。ところが大阪教大は残り1分に阪本が起死回生の2点を決め延長にもつれこ

んだ。延長に入ると互いに速攻の応酬で観衆をわかせたが7―7から大阪教大は後半40秒田中が決勝の1点をあげた。プレーの堅実さに優る大阪教大の勝利といえた。（望月仲三郎）

東女体大（関東）5（1―2、4―1）3 中京

○……1―2とリードされた東女体大は後半1分7MT（西田）を決めて同点としてから元気づき11分赤岸で逆転、16分本告のゲットで4―2と開いた。
　中京はよく走るのだが相手ディフェンスを前にして切り崩すタイミングが遅く、立ちあがり2―0とした出足もあとがつづかなかった。後半21分佐竹のゲットで3―4とし興味をもたせたが、そのあと慎重さを欠き、逆に24分相手のポストプレーに傷口を拡げられた。
　中京の敗退は番狂せといえる。（杉山）

東教大〃5人攻撃〃の苦闘

▽準決勝

東女体大 7（3―1、4―3）4 大阪教大

得	【東女】		【大教】	得
0	増田	GK	原	0
0	前島	GK	小谷	0
4	西田	FP	太田	0
1	本告	FP	八木	0
0	橋	FP	松原	0
0	赤岸	FP	田中	1
2	高橋	FP	山下	0
0	篠倉	FP	阪本	2
0	坂口	FP	山木	1
0	我妻	FP	大柳	0
0	藤森	FP	市房	0
0	石塚	FP		
7	（1）	7MT	（0）	4

（審・槇、近藤）

○……大教大は3分田中が先取点をあげたがパスプレーに優る東女体大はすぐ西田で同点、11分高橋で逆にリード、後半開始直後大教大は山本の巧技で2―3とし興味をつないだが東女体大の攻撃はソツがなく15分6―2とし勝利を動かないものとした。大教大は終盤阪本が連続ゴールするなどしたが攻撃に鋭さがなく勝機はなかった（杉山）

日体 12（4―0、8―4）4 東京教大

得	【日体】		【東教】	得
0	大工原	GK	松井	0
0	長谷川	GK		
1	嶋田	FP	岡田	2
1	赤塚	FP	畑中	2
1	小貫	FP	橋本	0
5	木村	FP	名賀	0
2	福田	FP	秋山	0
0	八木	FP	白鳥	0
2	岩木	FP		
0	小林	FP		
0	坂本	FP		
0	鈴井	FP		
12	（0）		（2）	4

（審・幸田、栗山）

○……総勢7人という東教大、秋山が左足をねんざしてしまいディフェンスがやっと。攻撃はほとんどの時間5人で攻撃するという痛々しい試合だった。
　日体は2分木村のゲットで先制したが、そのあとは策におぼれすぎて20分まで無得点、21分小貫のゲットが2点目という貧攻、後半は赤塚（全日本）の好リードと木村（全日本）の活躍で着実にポイントしたが、全日本学生の準決勝というにはどうにも盛りあがらぬ内容だった。（杉山）

▽3位決定戦

東京教大 5（2―2、3―2）4 大阪教大

4年連続の顔合せ

▽決勝

日体 16（7―1、9―2）3 東女体大

得	【日体】		【東女】	得
0	大工原	GK	安藤	0
1	嶋田	FP	西田	0
4	赤塚	FP	本告	0
5	小貫	FP	橋	0
4	木村	FP	赤岸	1
0	福田	FP	高橋	1
2	岩本	FP	篠倉	1
0	坂本	FP		
16	（1）	7MT	（0）	13

（審・東堀）

○……日体大の快勝だった。選手一人一人がスピード、テクニックで東女体大を上回り、コンビネーションでも格段の差があるのだから勝って当然かも知れない。
　ただ立ち上がりは両チームともリズムに乗り切れず、ボールを回すだけでシュートに結びつかなかった。しかし5分過ぎ、日体大が先手を取った。小貫が左サイドから倒れ込みシュートを決めた。すぐ東女体大も反撃、高橋が中央からカットインシュートを決めた。秋の関東リーグで前半4―4と善戦した東女体大の粘りがこの試合でも見られるのでは―と思ったのも束の間だった。日体大のスピードに東女体大のディフェンスはひとたまりもなかった。14分、関東リーグ得点王の赤塚が速攻で、16分には小貫―赤塚と続ぎ加点、17分にも木村（全日本）が中央から見事に決めた。余裕の出来た日体大はその後、スカイプレーフェイントなど多彩な攻撃でネットをゆさぶり、結局16―3という大差で三年連続七度目の優勝を決めてしまった。
　東女体大を含め女子の各チームはパス一つにしてもいかに得点するか、いかにシュートに結びつけるかといった意図も全く感じられない。ただボールを回すだけ。そのうえハンドリングも悪く、ボールを両手で持つ時間も長い。レベルの低さを想わせたし、実業団に追いつくのは当分先の話という感じの大会だった。（小山敏昭）

女子優勝の日体大・藤原監督の話　実業団に追いつき、追い抜くつもりでこの大会に臨みました。優勝したこのチームの主力はほとんどが四年生、だから絶対チャンピオンになってやるんだという気迫に満ちていました。

東京学芸大
青木主将、石塚マネ亡くなる
国鉄バス事故に遭遇

○……11月16日静岡県焼津市でおきた国鉄ハイウェイ・バス事故は若い二人の命を奪ったが、不運な犠牲者となったのが、3日前に大阪市中央体育館で元気なプレーをみせた東京学芸大主将の青木四郎君（21才、3年、国立高出）と同マネジャーの石塚三奈子さん（21才、3年）とあって大会第4日のコートサイドとスタンドはこの悲報に暗いムードがただよった。
○……二人は13日の1回戦で同志社に敗れたあと現地解散後の自由時間をつかい同行の金子実君＝重態＝らと京都見物のあと帰京する途中で〃不運〃としかいいようがなかった。東京学芸大は今秋の関東学生リーグで2部優勝し、入れ替え戦でも立教に勝ち1部入りを果したばかり。青木主将の攻守はその原動力だった。閉会式（17日）では二人の冥福を祈って役員選手、観客全員が1分間の黙とうをささげた。

世界学生、16ケ国が参加

国際学生スポーツ連盟（FISU）は今冬12月28日から来年1月5日までルンド市（スウェーデン）で行う第5回世界学生選手権の参加国（16ケ国）を次のとおり発表した。日本は不参加。
　ソビエト（前回優勝）、アルジェリア、ブラジル、ブルガリア、チェコ、デンマーク、フィンランド、フランス、西ドイツ、アイスランド、イタリア、ノルウェー、ポーランド、ルーマニア、スペイン、スウェーデン。

◇各地学生秋季リーグ戦記録（続報）

東北大、全勝優勝飾る

東北・北海道

◇第17回東北・北海道秋季学生選手権◇10月13～15日◇岩手大学体育館
◇参加10校
▽予選ラウンド

東北学院 18（1－0、2－2、…、6－11、9－4）17 岩手大
山形大 24（13－10、11－9）19 秋田大
北海道大 27（13－9、14－5）14 東北工大
福島大 17（9－8、8－8）16 仙台大
東北大 15（8－7、7－3）10 宮城教大

勝者5校が決勝リーグへ、敗者5校が「6～10位決定リーグ」へ。

▽決勝リーグ

東北学院 18（10－4、8－2）6 山形大
福島大 10（5－4、5－4）8 北海道大
東北大 10（4－5、6－2）7 東北学院
北海道大 23（14－6、9－4）10 山形大
東北大 13（7－7、6－3）10 福島大
福島大 15（9－0、6－1）1 山形大
北海道大 13（6－3、7－5）8 東北学院
東北大 19（10－5、9－3）8 山形大
東北学院 11（7－5、4－6）11 福島大
引き分け
東北大 18（12－9、6－4）13 北海道大

【順位】①東北大4戦全勝②福島大2勝1敗1分③北海道大2勝2敗④東北学院1勝2敗1分⑤山形大4敗

▽6～10位決定リーグ

岩手大 31（13－6、18－4）10 秋田大
東北工大 15（8－7、7－1）8 仙台大
岩手大 17（8－9、9－4）13 宮城教大
東北工大 25（13－7、12－4）11 秋田大
仙台大 13（6－5、7－5）10 宮城教大
仙台大 24（15－6、9－5）11 秋田大
岩手大 26（16－5、10－6）11 東北工大
宮城教大 29（17－3、12－2）5 秋田大
岩手大 15（8－9、7－5）14 仙台大
東北工大 14（7－6、7－5）11 宮城教大

【順位】⑥岩手大⑦東北工大⑧仙台大⑨宮城教大⑩秋田大

【後記】春季2位で秋季連勝をめざす仙台大が福島大に接戦の末敗れ、同優勝の東北学院も岩手大の食い下りにあって辛勝という波乱ぶくみのスタートとなった。

決勝リーグも熱戦がつづいたが、第2日2勝で首位に立った東北大が最終日も手固い試合運びをみせ全勝。

全般的にオフェンスとディフェンスの均衡がとれていないチームがまだまだ多い印象をうけた。そのため個人プレー的なものに頼る展開が多く、この競技本来のチームプレーがあまりみられなかったのは残念である。

今後の課題として基本である組織プレーをみつめなおす必要があると思う。（菊池隆司・競技委員長、岩手大3年）

北大、全勝で4連勝

北海道

◇第4回北海道学生選手権◇10月27～29日◇北見工大◇参加6校

旭川教大の新加盟で北海道学生界も6校リーグが実現できるようになった。

実力的には今シーズンも北大が一歩リードしていたが、各校ともはっきり進境のあとを示し見応えのあるゲームも多かった。

北大の優勝は4年連続である。

北見工大 20（12－7、8－5）12 釧路教大
小樽商大 19（12－6、7－1）7 室蘭工大
北大 27（10－8、17－5）13 旭川教大
小樽商大 18（8－10、10－7）17 釧路教大
北見工大 25（11－8、14－5）13 旭川教大
北大 23（14－3、9－5）8 室蘭工大
釧路教大 17（6－6、11－4）10 旭川教大
北大 22（10－6、12－3）9 小樽商大
北見工大 23（12－5、11－4）9 室蘭工大
北大 28（18－4、10－8）12 釧路教大
小樽商大 12（9－6、3－5）11 北見工大
室蘭工大 19（7－7、12－5）12 旭川教大
北大 23（12－7、11－3）10 北見工大
釧路教大 19（12－2、7－0）2 室蘭工大
小樽商大 11（4－3、7－7）10 旭川教大

【順位】①北海道大5戦全勝②小樽商大4勝1敗③北見工大3勝2敗④釧路教大2勝3敗⑤室蘭工大1勝4敗⑥旭川教大5敗

中京、抜群の実力
25度目の優勝

東　海

◇10月15日〜11月5日◇名古屋天神山ハンドボール場ほか◇参加1部6校、2部8校

雨天のため第4日に顔を合せた3勝同士の中京×名城が〃決勝〃名城の滑り出しはけして拙くはなかったが、中京は前半18分4―4のタイとしたあとじわじわと得点差を拡げた。

後半、名城も気をとりなおして6分7―8と迫ったが、中京は夏目、梶村のゲットで優位を保ち、終盤は布垣の活躍で相手をねじふせた。中京は岐阜大戦も順当勝ちして全勝、5シーズン連続、通算25度目の優勝を飾った。秋季は実に13年間無敗である。

2位には5シーズンつづけて名城が座り3位以下では久々に勝ちこした岐阜大の健闘が目立った。

2部は4校ずつの予選リーグのあと、各2校により順位決定リーグを行い三重大、中部工大、愛知大が同率でトップに並び得失点差で優る三重大が40年秋以来の優勝を飾った（通算は本誌調べでは32秋、38春、40秋につづき4度目）

▽1部

中京 29（19―2、10―3）5 愛知教大
名城 21（8―6、13―4）10 南山
岐阜大 30（16―3、14―6）9 名大
岐阜大 15（7―6、8―7）13 南山
名城 18（11―4、7―6）10 愛知教大
中京 31（15―3、16―0）3 名大
中京 24（12―4、12―6）10 南山
愛知教大 19（9―9、10―4）13 名大
名城 22（13―7、9―12）19 岐阜大
南山 28（12―1、16―7）8 名大
岐阜大（6―4、8―6）10 愛知教大
中京 19（8―4、11―8）12 名城

得	【中京】		【名城】	得
0	福井	GK	高橋	0
0	横山	GK	杉浦	0
3	渡辺	FP	飼沼	2
0	松本	FP	福田	2
0	高橋	FP	川口	2
2	岸見	FP	森	0
6	布垣	FP	佐藤	1
3	成田	FP	田中	3
1	夏目	FP	山木	2
1	小川	FP	石塚	0
3	梶村	FP	松井	0
0	佐藤	FP	江崎	0
19	（1）	7MT	（1）	12

（審・宇津野・古川）

中京 19（10―2、9―5）7 岐阜大
名城 29（18―5、11―5）10 名大
愛知教大 17（7―6、10―9）15 南山

【順位】①中京5戦全勝②名城4勝1敗③岐阜大3勝2敗④愛知教大2勝3敗⑤南山1勝4敗⑥名大5敗

3校同率から三重大

▽2部A組

愛知大 10―8 中部工大
静岡大 21―16 愛知工大
中部工大 24―4 愛知工大
愛知大 22―14 静岡大
愛知大 27―6 愛知工大
中部工大 16（分）16 静岡大

【順位】①愛知大②中部工大③静岡大④愛知工大

▽同B組

名工大 17―9 名古屋学院
三重大 27―10 滋賀大
滋賀大 19―18 名工大
三重大 37―7 名古屋学院
滋賀大 27―22 名古屋学院
三重大 18―10 名工大

【順位】①三重大②滋賀大③名古屋工業大④名古屋学院

▽同1〜4位リーグ

三重大 20（9―5、11―3）8 愛知大
中部工大 27（13―3、14―8）11 滋賀大
愛知大 22（7―9、15―5）14 滋賀大
中部工大 25（13―14、12―5）19 三重大

三重大×滋賀大、愛知大×中部工大は予選リーグの記録を適用。

▽同5〜8位決定リーグ

静岡大 29―16 名古屋学院
名工大 15―4 愛知工大
静岡大 23―4 名工大
名古屋学院 不戦勝 愛知工大

静岡大×愛知工大、名工大×名古屋学院の記録は予選リーグの記録を適用。

【2部順位】①三重大2勝1敗（得失点差23）②中部工大2戦1敗（20）③愛知大2勝1敗（2）④滋賀大⑤静岡大⑥名古屋工業大⑦名古屋学院⑧愛知工大

名大1部に残留　◇東海学生秋季リーグ戦入れ替え戦

名大（1部）12（5―7、7―4）11 三重大（2部）

女子も中京が圧勝

東　海（女子）

◇10月15日〜11月5日◇南山大グランドほか◇参加4校

初の4校リーグが採られた。優勝を争うとみられた中京、中京女のうち中京女が緒戦で岐阜大の善戦にあって引き分け、優位に立った中京が中京女戦も初手から圧倒的な攻守で押しまくり快勝、岐阜大戦も巧みな試合運びで勝ち2シーズン連続して全勝、通算12度目の優勝を遂げた。

愛教大、岐阜大の成長からリーグとしての活気がでてきたのは喜ばしい。

中京 15（8―3、7―1）4 愛知教大

中京女 5（3−3、2−2）5 岐阜大
引き分け
愛知教大 6（3−1、3−2）3 岐阜大
中京 15（9−2、6−3）5 中京女
中京 11（7−1、4−3）4 岐阜大
中京女 10（4−3、6−2）5 愛知教大

【順位】①中京3戦全戦②中京女1勝1敗1分③愛知教大1勝2敗④岐阜大2敗1分

松山商大6度目の栄冠

中四国

◇第11回中四国学生選手権◇10月28、29日◇広島商大球技場◇参加1部5校、2部6校

1部は春季優勝の山口大、秋に強い松山商大さらに新進・広島工大、1部へ返り咲いた広島商大が久々に活気をとりもどし混戦模様となった。

第1日、松山商大が堅実に2勝をあげたのに対し、その他の3校は激しく星をつぶしあい、しかも近大呉が広島工大を破る波乱もあって優勝争いは白熱した。

第2日、まず松山商大が広島工大に辛勝して3勝をマーク、次の広島商大戦で一気に優勝を決めるかにみえたが、広島商大は後半貴重なゴールをあげて望みをつないだ。

広島商大は近大呉との最終戦で21点差をつけて勝てば松山商大と同率ながら得失点差で上廻ることになり14シーズン（7年）ぶりの優勝がころがりこむわけだったが15点差にとどまり、松山商大が2シーズンぶり6度目（春との通算）の栄冠に輝やいた。選手権（秋季）はこれで第8回（昭44）以来4年連続。

2部は2組の予選リーグのあと各組同位者で順位を争い、香川大が愛媛大に快勝、初優勝した。1、2部揃って四国勢の優勝は初めて

▽1部
広島工大 10（5−5、5−4）9 広島商大
松山商大 10（6−3、4−3）6 山口大
広島商大 13（8−6、5−6）12 山口大
松山商大 23（11−3、12−3）6 近大呉
松山商大 11（7−6、4−4）10 広島工大
広島商大 9（5−5、4−3）8 松山商大
山口大 10（5−3、5−5）8 広島工大
山口大 14（3−1、11−1）2 近大呉
広島商大 22（9−4、13−3）7 近大呉

【順位】①松山商大3勝1敗（得失点差21）②広島商大3勝1敗（16）③山口大2勝2敗④広島工大1勝3敗（得失点差マイナス3）⑤近大呉1勝3敗（マイナス43）

▽2部予選リーグA組
広島大福山 14−2 広島大
香川大 15−10 広島大福山
香川大 14−3 広島大
▽同B組
岡山大 29−3 山口大工学部
愛媛大 11−10 岡山大
愛媛大 19−12 山口大工学部
▽同5位決定戦
山口大工学部 10−2 広島大
▽同3位決定戦
岡山大 16−7 広島大福山
▽同決勝
香川大 16（10−3、6−3）6 愛媛大

関東学生3〜5部

5部は新加盟の駒沢大

◇10月3〜21日◇駒沢第一球技場◇参加3部8校、4部8校、5部6校

▼3部
都立大 22−9 独協
東海 21−8 順天堂
千葉商大 21−14 武蔵工大
一橋 25−9 東京工大
東海 22−11 独協
順天堂 19−17 都立大
一橋 18−14 千葉商大
武蔵工大 11−9 東京工大
都立大 16−11 武蔵工大
東京工大 12−8 順天堂
独協 18−16 千葉商大
一橋 18−7 東海
東京工大 15−14 独協
一橋 13−13 都立大
武蔵工大 18−17 東海
千葉商大 20−18 順天堂
東海 14−13 都立大
順天堂 22−14 独協
東京工大 20−15 千葉商大
一橋 28−7 武蔵工大
武蔵工大 18−12 順天堂
一橋 28−14 独協
都立大 15−14 千葉商大
東海 15（分）15 千葉商大
東海 23−11 東京工大
順天堂 32−25 一橋
武蔵工大 13−10 独協
都立大 12−7 東京工大

【順位】①一橋6勝1敗（2度目）②東海4勝2敗1分③武蔵工大・都立大4勝3敗⑤順天堂・東京工大3勝4敗⑦千葉商科大2勝4敗1分⑧独協1勝6敗

▽得点王 徳光弘介（一橋）48点

▼4部
横浜商大 24−18 東大
成蹊 17−11 千葉大
青山学院 12−9 専修
茨城大 17−9 明治学院
東大 19−14 明治学院
横浜商大 13−10 専修
成蹊 12−11 青山学院
千葉大 17−10 茨城

専修 11－9 千葉大
茨城大 17－11 東大
成蹊 17－10 明治学院
横浜商大 14－9 青山学院
専修 19－13 東大
青山学院 18－12 千葉大
横浜商大 21－8 明治学院
成蹊 18－13 茨城大
青山学院 20－14 明治学院
横浜商大 18－13 千葉大
茨城大 14－12 専修
成蹊 18－13 東大
成蹊 19－12 横浜商大
青山学院 14(分)14 茨城大
専修 11－9 明治学院
東大 22－6 千葉大
成蹊 9－8 専修
千葉大 23－8 明治学院
茨城大 28－15 横浜商大
青山学院 16－10 東大

【順位】①成蹊7戦全勝(初)②横浜商科大5勝2敗③茨城大・青山学院4勝2敗1分⑤専修3勝4敗⑥千葉大・東大2勝5敗⑧明治学院7敗

▽得点王 稲見東位(横浜商大)44

▼5部

上智 21－12 東京写真大
駒沢 32－7 神奈川大
東京経大 15－14 東京理科大
東京理科大 17－14 上智
東京経大 19－13 東京写真大
神奈川大 20－13 東京理科大
駒沢 26－6 東京写真大
駒沢 14－12 上智
神奈川大 19－17 東京経大
東京経大 18－11 上智
東京理科大 15－10 東京写真大
駒沢 14－11 東京経大
上智 20－17 神奈川大
駒沢 18－9 東京理科大
東京写真大 26－6 神奈川大

【順位】①駒沢5戦全勝(初・新加盟)②東京経大3勝2敗③上智・東京理科大・神奈川大2勝3敗⑥東京写真大(新加盟)1勝4敗

▽得点王 八木辰哉(駒沢) 40

(注)1、2部は前号既報

5部も8校制に

関東学連は来季から群馬大の加盟を発表した。"休部"扱いの東京農工大山梨大、流通経済大(茨城)らも復帰を目指しており、5部も8校制が布かれる可能性が強い。

北海道学連が独立

来年度ICは東京で

全日本学連は11月12日大阪で総合役員会を開き北海道学生連盟の独立を承認した。

北海道学連はこれまで東北・北海道学連北海道支部として活動、最近になり加盟校が6校に増えたことや、東北各地まで遠征して試合(公式大会)を行う経済的負担などから独立を希望、来年度からの実現をみたわけである。なお、来年度の全日本学生選手権は11月東京で開かれることに内定。

全日本学生選手権 すべて「学生負担」に疑問

斉藤 和夫

15年前に発足した全日本学生選手権は大会毎にナショナルチームの主軸となるべき好素材を輩出させ、底辺拡大指導者の温床としても重きをなして来た。

しかしながら全般を統制する全日本学生連盟の実情は必ずしも満足な状態ではなく、斯界の主流としての位置を維持するには多くの問題をかかえていると思う。

特に大会運営費の実情には考えさせられる。一切を学生個々の負担でまかない、捻出していることは一人のOBとしてなんとも申訳けない話である。私のような田舎者でさえ学生時代の部生活、試合の思い出、プロセスが人生の基幹として日常生活にしみとおっている。現在社会人で活躍する多くの選手、OBはいずれも同じ思いではないか。

我々の学生時代を思い出せば、すべてを現役に負担させることは学生にとっていかに苦しいかがうかがえよう。

伝え聞くところによれば来年度の開催地は運営費の点でなかなか引き受け手がなかった、という。

学生の金銭的負担をできるかぎり転くするような対策を考えたいものである。

第一に組織としての能力についてふれたい。今回の場合も大会前日の審判長会議の連絡ひとつにしても不充分で、私など指定された時刻、会場に行ったところ誰も居ず、不馴れな大阪市内をあちこちタクシーでとび歩いた末、結局間にあわず、それればかりか"欠席"の私をとりあげていたとか聞くと笑うに笑えない。

監督主将会議場で会った責任者は「学生が連絡したことで自分に云われても困る」の言を聞くに及んでやり切れない気がした。

そこまでも学生に責任を負わせるのであろうか。

全日本学連理事会とはなにか、全日本学生選手権の運営は費用ばかりかすべてを学生の"負担"でこれからも押し通すのだろうか。

学生の自主性を認める一方、OBとしての我々の責任をこの際考えなおすべきだろう。これは全日本学連に限らず、各学連にもあてはまろう。学連組織の強化はモントリオール・オリンピックの勝利につながるとも云える。有識者諸賢の御一考を請う次第である。

(茨城大OB、関東学連審判長、投稿)

第4回全国教職員大会研修報告①

昭和47年8月16日より千葉県佐原市で全国教職員大会が行われ、その一環としての研修会が佐原市第二中学校の体育館で代表者会議のあとひき続き行われました。この研修会は過去3回の研修をへてきており、第1回は、元東京大学の神田順治先生（現日出学園長）の「スポーツの概論」そして同じく東京大学の広田公一先生の「ハンドボールのトレーニング」第2回は、広田公一先生の「ハンドボールのトレーニングその2」元大阪体育大学の石井喜八先生（現日本体育大学）の「ハンドボールのキネシオロジー」第3回は広田公一先生の「ハンドボールのトレーニングその3」をそして東京大学の心理部門を担当されております平田久雄先生に「スポーツの心理」と以上の先生方にスポーツのあり方そしてスポーツの実践の方法を多角的に御講演下さり、われわれハンドボール指導者を教職員大会を通して指導下さいました。

一方、これらの御指導に対して何とかわれわれ指導者が自己のものとして実践の場に役立てなければならないと考えて、この研修会をはじめたのであります。これが一層みのりあるものとして、われわれ指導者が現場で感じて来たこと、そしてこれを一つの資料として皆んなで討議することによって指導の場の励みとして一歩一歩適切な指導性を培うことが目的であると考えます。この様な背景の中で今年は一つわれわれの中で問題提起そして日頃研究を蓄積されている方々にお願いを致し発表をしていただくことに致しました。幸いにも大阪寝屋川高校の望月伸三郎先生、そして茨城土浦第一高校の斉藤和夫先生の御両名が発表を担当していただくことが出来、今までの研修を土台として立派な発表であったと感謝致しております。以下今研修会の内容を記します。

司会　渋谷康行

挨拶　荒川清美

発表者

1　望月伸三郎

「インターハイ、ハンドボール選手の体力の実態」

2　斉藤和夫

「ハンドボールのゲーム中の間合について」（次号掲載の予定）

総評　荒川清美

望月伸三郎先生は、近畿ハンドボール研究会の一員であり、過去数回のインターハイ・出場選手の体力について追求研究され、その実態を把握されることにより、ハンドボール選手と一般生徒との体力の比較検討分析を記したものであります。また今回は、過去4回の体力の推移をみ、これらの推移より、日本のナショナルチームへの影響等を分析結論を出されました。

次に斉藤和夫先生は、ハンドボールゲーム中の間合を独自に研究され、特にゲーム中の間合を独自に研究され、特にゲーム中の間合とは何か、そしてデフェンス、オフェンスからみた間合を分析されシュート時の得点の確立の高い間合のとり方、そしてディフェンスとしての間合のとり方を関東学生リーグ戦を通して御研究されたことを報告していただきました。

御両名の研究は貴重なものでハンドボールの関係者が積極的にこの場を利用して今後活溌な討議をすることによってハンドボール界全体の向上を期待されるものであると考えます。尚今回は準備その他の点で研修会担当者が連絡不備があったためこれら二つの発表に対して一層の論議が出来なかったことを残念に考えております。また例年のごとく一部の人達の研修会であってはならないと同時に今大会に参加された多くの人達がただ単に試合に参加されるのみでなく、一方ではこの様な質素な努力をしている方々の一面をも見、そして聞くことが一層この研修会の目的であるわれわれの指導性を増す一要素ともなりますので、今後多くの参加を希望するしだいです。また準備する側の者として、今後は多方面にわたり多くの方々に呼びかけ、いろいろと御批判をいただきたいと考えてあります。

イスラエル代表も参加

ヨーロッパカップ開幕

男子第13回、女子第11回ヨーロッパカップは男子24ケ国25クラブ女子14ケ国15クラブが参加して10月末から熱戦の幕をあけた。

男子では2連勝を目指すパルティザン（ユーゴ）を筆頭にステアウア・ブカレスト（ルーマニア）、ライプチヒSC（東ドイツ）、バニク・カルニバ（チェコ）、MAI・モスクワ（ソビエト）らの東欧勢が強そうで来春来日が予定されるFA・ギョッピンゲン（西ドイツ）、スタディオンコペンハーゲン（デンマーク）らがどこまで食いこむかも注目される。

女子は4連勝の偉業を狙うスパルタク・キエフ（ソビエト）の試合ぶりが焦点。

なお、アジア転籍が決まっているイスラエルはこの大会だけは当分の間代表を送ることが認められた。

インターハイ・ハンドボール選手の体力の実態

望月伸三郎

筆者らはこれまでインターハイに出場したハンドボール選手を体力という面からとらえようとしてきた。

ここでいうところの体力とは、一般的体力の分類からいうと行動体力ということになるであろう。採り上げた測定項目は体力診断テストといくつかの項目を重複させ他のいくつかはハンドボール競技の体力特徴を示すと思われる項目を定めて組入れた。

われわれも昨年度も報告をしたが、その内容はハンドボール選手と一般生徒との体力の比較およびハンドボール選手の体力の内容を形態と機能の面から分析したものであった。

今回報告するものは過去4カ年間のインターハイに出場したハンドボール選手の体力の変遷と、これから見られる年次の発達の度合は日本のナショナルチームにどのように影響を与えるであろうかと言う観点から分析を加えてみたものである。

日本のナショナルチームに連なるインターハイ選手の輩出の現状をとらえてみようというところに今回の分析の発端があったわけである。ところで、われわれは昭和43年度以来、インターハイに出場した男、女それぞれのチームのいくつかを選び出し、毎年体力測定を実施してきた。

今年はミュンヘン・オリンピックの年でもあり、計画されたナショナルチームの成果が問われる年でもあるが、われわれ高体連の立場にあるものにとっては桧舞台でのオリンピックの成果よりも既に次期モントリオールのオリンピックに向って出発しなければならないと考えている。それゆえ、過去4カ年間の体力面からとらえたインターハイ選手の現状は必ずや次期オリンピックのモントリオールで活躍してくれるであろうインターハイ選手の輩出を心から期待してやまない。

測定方法

測定項目は、図1に示したとおり、形態と機能の両側面から体力をとらえようとしたものである。

① 形態について

身長、体重は一般に行なわれている測定法で行なった。指先長は垂直立位で利腕の上肢を挙上し、床面から指先端までの距離をあらわした。手長は尺側茎突点より指先端まで手幅は手掌を出来るだけ外側にひらかせ、栂指と小指の先端から先端までの距離を計測した。

図1　全日本高校ハンドボール選手の体力測定

測定項目

〔形　態〕
1身長　2体重　3指先長（垂直立位で利腕上肢挙上の高さ）4手長(右)　5手長(左)　6手幅(右)　7手幅(左)

〔機　能〕
1握力(右)　2握力(左)　3背筋力　4反復上体おこし　5体前屈　6体後反　7垂直跳　8サイドステップ　9 9m3往復走　10踏台昇降(5分間)　男(50cm)　女(40cm)

測定チーム数　男，女

昭和43年度	無作為	各16チーム	男14，女12チーム
昭和44年度	上位	各16チーム	男12，女13チーム
昭和45年度	上位	各16チーム	男13，女14チーム
昭和46年度	上位	各16チーム	男5，女10チーム

（チーム各7名（主力選手）を測定）

② 機能について

握力・背筋力・立位体前屈・伏臥上体そらし・垂直とび・反復横とびの以上6種目は体力診断テストと同一方法によって、また反復上体起こしは腹筋の筋持久力をあらわすと考えられる項目で、仰臥姿勢となり両手を首の後にくみ、上体を肘が膝につけるまでおこす。男子は30秒間の出来る限りの回数、女子は20秒間の出来る限りの回数をもってあらわした。9m3往復走とはスタートラインから9mのところに3個のハンドボールを置き、合図により1回1個のボールを持ち帰る。すなわち9mを三往復するわけである。この時間を計測する。踏台昇降テストは男子50cm、女子40cmの踏台昇降運動を5分間行なわせ指数を算出する方法で行なった。

測定に参加したチームの内容は昭和43年度が無作意に、昭和44年度、45年度、46年度は男女それぞれ上位の16チーム。いいかえると準々決勝の前まで進出したチームということにしたが、実施したチームは図1のようになった。昭和46年度は測定日がちょうど台風にあたり、測定会場と試合場との距離がかなりあったのでこのような参加チーム数となった。

測定参加の各チームの人数は主力選手7名を対象とした。したがって、これまでに男子44チームの308名、女子49チームの343名の合計651名を測定したことになる。

図2は男子選手の形態について縦軸に測定項目と数値、横軸は各年度をあらわしてある。

手幅、手長は変化をしているように見えるが、変動の巾からいってそれほど変っているとは思われない。大きく変化がみられたのは本年度体重平均値で2kgの増加である。身長は年々大きくなっていることがうかがわれよう。

図3は男子の機能の変化を示している。踏台昇降は年次下降の傾向がみられたが、本年度はもちなおし、敏捷性筋パワーを示す9m3往復走、サイドステップ、垂直跳でやや変動を示していると思われる。

また柔軟性のそらし、体前屈はやや上昇の傾向がみられる。筋持久力の反復上体起こしは変化がみられない。握力についてはやや低かった昭和43年を除いて変化がみられないようである。

図4は女子の形態の項目を、男子と同様にグラフにしたものである。身長、体重、指先長は回復している傾向にあり、他は小さい変動を示しているだけといえよう。

図5は女子の機能について示し

図 2　全日本高校ハンドボール選手の体力
（形態の部）の4カ年変化
〔男　子〕

図 3　全日本高校ハンドボール選手の体力
（機能の部）の4カ年変化
〔男　子〕

図 4　全日本高校ハンドボール選手の体力
（形態の部）の4カ年変化
〔女　子〕

図 5　全日本高校ハンドボール選手の体力
（機能の部）の4カ年変化
〔女　子〕

たものである。踏台昇降テストは年次低下の傾向がみられたものが本年は回復が認められた。9m3往復走、垂直跳、反復上体起こし背筋力についてはあまり変化がみられないが、サイドステップと柔軟性の2項目と握力に上昇の傾向がみられると思われる。

われわれ高体連ハンドボール部は、これまでにも測定結果にもとづき、もし日本のナショナルチームを大型化しようとするのであれば、高校の選手を大型化しなければならないと主張してきたとおりである。

そこで、インターハイ各年度のベスト10位にあたる記録を比較検討してみることにした。

図6、図7は男子の10位までの形態と機能の平均値の記録が示されているものである。

要するに、1年に10名ずつの選手を何らかの形でプレーを継続してゆけるようにすれば、1オリンピアードに40名が候補選手の対象になると考えられるからである。

そこでグラフであるが、10位の形態を見ると、身長、体重、指先長は上昇し、身長では毎年すこしずつ大きくなり、4カ年間で約3cm大きくなっていることがわかる。体重は昨年1ケ年で5kg増加したことになる。

機能で上昇傾向がみられたのは9m3往復、上体そらし、握力の

図 6　全日本高校ハンドボール選手の体力
（形態の部）10位の4カ年変化
〔男　　子〕

図 7　全日本高校ハンドボール選手の体力
（機能の部）ベスト10位の4カ年変化
〔男　　子〕

図 8　全日本高校ハンドボール選手の体力
（形態の部）10位の4カ年変化
〔女　　子〕

図 9　全日本高校ハンドボール選手の体力
（機能の部）ベスト10位の4カ年変化
〔女　　子〕

右で、他はあまり変化が認められなかった。

女子についても同様ベスト10位を抽出し、平均値をグラフにしたのが図8、図9の形態と機能である。

女子の形態では男子とくらべ身長、指先長がこの2年間、下降傾向にあり、体重の2kg大きくなった他はあまり変化がみられない。

同じく女子の機能では下降気味であった踏台昇降テストがもちなおし、上体そらしが本年度4cm大きくなっていることが明らかとなった。

そこで日本で一番大型化されたナショナルチームと高校選手の男子の形態を比較してみると図10のようになる。

この図は昭和43年から44年度、45年度、46年度それぞれ測定に参加した全選手の平均身長(縦軸)と平均体重(横軸)を線で結んで示したものである。○印は各年度のベスト10位までの平均値が示されている。これをみると昭和43年から45年までの全選手の平均値は体重

にそれほどの変化がみられないが身長が少しずつ伸びているようである。ところで昭和46年度は測定に参加したチーム数が少なかったにもかかわらず身長、体重は大きく増加しているのである。

また◎は昭和46年度ナショナルチームで、アジアオリンピック予選を勝ち抜いたチームの平均値を示している。これをみると○印のベスト10位の平均値は年々ナショナルチームに近ずいていることがわかる。

同様にして女子を見てみると図11のようになる。◎印は昭和46年世界選手権大会にヨーロッパへ遠征したナショナルチームの平均値である。

よくみてみると高等学校選手の平均値とナショナルチームの平均値がほぼ等しくなっていることがわかる。

しかし、男子とちがってベスト10位までの各年の平均値はナショナルチームを大きく上廻っていることは注目に価する。ここにおける比較は単に身長と体重の形態面での比較であるが、機能面をそれ相応に向上させれば、現在のナショナルチームを大きく上廻ることが推察出来よう。

更にここで日本のナショナルチームは、諸外国との間でどのような位置にあるかを男子の資料からみてみると図12に示したとおりである。これは昭和45年度の世界選手権大会に参加したチームの身長体重の比較である。

この大会で優勝したのはルーマニアで、2位が東ドイツ、3位がユーゴであった。

この図12から大雑把に見ても日本を除いた各チーム平均は体重が80〜83kgの間にあり、身長は178cmのアメリカから187cmのスウェーデンの間にちらばっている。平均値をとらえてみると、●印で体重が82kg、身長が183cmというところにある。

当時の日本のナショナルチームは、身長からいえば、チェコやアメリカチームとほぼ等しい水準にあるが、体重は約8kgも少なく、世界選手権大会参加者の平均値からは約10kgも劣っていることがわかる。

しかし図の矢印で示したように日本ナショナルチームは昭和46年度がアジア予選のためにやや大型化されたことがわかるであろう。

ところで、われわれはインターハイに出場した年々のベスト10位までを抽出して分析を進めてみたわけであるが、1年に4名を残したとすれば4年間に16名を確保することになる。そうすることにより日本のナショナルチームに少なからず影響を与えることは自明であろう。

われわれは今回、過去4カ年間のインターハイ出場上位チームの体力測定を実施し、体力向上の傾向をさぐり、そしてこれら高校優秀選手のベスト10位の平均値をもって、ナショナルチームとの比較を試みてきたわけであるが、10位ということが問題ではなく、インターハイに出場できなかったチームからの選出を考慮に入れ、そしてインターハイ上位チームのベスト4位くらいまでをマークして技術の向上につながるならば日本のナショナルチームに少なからず影響を与えるものと考えられるわけである。

本稿を草するにあたり大阪体育大学の石井喜八教授の御指導と近畿ハンドボール研究会　桃山学院大学　馬場太郎教授、大阪薬科大学　中出盛雄助教授、大阪薬科大学　相浦義郎氏、大阪体育大学山崎　武氏、府立門真高校　北岡大覚教諭

以上の方々の御協力をいただいたことを感謝申し上げます。

本誌の次回発行は48年2月です。（1月は休刊）

◎ 昭和46年度ナショナル
○ 各年度10位
— 各年度平均
---- 昭和46年度平均

〔身長・体重の比較〕 上から図10 インターハイ男子，図11 インターハイ女子，図12 45年世界選手権男子

S43～46年度インターハイ出場ハンドボール選手　体力測定　年別平均値と標準偏差値並びにS46年度チーム別平均値と標準偏差値　　（男子）

番号	チーム名	所属都道府県名	身長	体重	胸囲	指先長	手長		手巾		筋力				柔軟性		瞬発力	敏捷性		持久力
											握力		背筋力	反復上体おこし	立位体前屈	伏臥上体そらし	垂直跳	サイドステップ	9m 3往復走	踏台昇降（5分間）
							右	左	右	左	右	左								
単位			cm	Kg	cm	cm	cm	cm	cm	cm	Kg		Kg	(30秒)回	cm	cm	cm	点	秒	指数
1	佐世保北	長崎	171.0	61.4	88.1	215.3	18.1	18.2	20.9	20.8	48.9	44.6	161.7	23.1	13.6	51.6	63.7	48.9	13.4	92.55
2	上田	長野	169.3	60.2	89.0	214.4	18.5	18.4	20.5	20.5	45.1	43.4	126.9	21.0	17.6	61.3	59.7	44.3	14.5	105.5
3	岩国工	山口	172.6	65.9	92.9	216.1	18.2	18.4	21.4	21.6	55.1	50.3	165.1	24.3	15.1	65.7	66.3	44.4	13.4	93.61
4	堺工	大阪	169.4	66.9	85.3	211.7	18.0	17.7	21.0	20.6	49.2	43.0	147.9	20.9	13.7	60.9	62.7	41.6	14.5	87.02
5	兵庫工	兵庫	173.3	62.9	86.7	218.0	18.7	18.6	20.9	21.0	48.9	43.8	142.8	21.7	13.4	60.7	58.3	40.9	13.7	94.49
全体平均値			171.2	63.5	88.38	215.1	18.3	18.3	21.0	20.9	49.44	44.82	149.04	22.20	14.69	60.03	62.14	44.00	13.89	94.86
〃 標準偏差値			5.16	8.04	5.50	7.81	0.88	0.88	1.09	1.01	6.55	4.93	24.53	2.15	4.90	9.14	5.31	3.81	0.65	11.74
S45平均値			170.64	61.55	87.95	215.49	18.83	18.80	21.22	20.96	48.34	43.61	156.40	22.06	13.32	58.74	63.75	45.69	13.89	81.73
〃 標準偏差値			4.97	5.35	3.80	7.39	0.98	0.92	1.10	1.10	5.53	5.85	20.75	2.15	5.35	5.84	7.14	4.42	0.56	11.66
S44平均値			170.5	61.6	—	215.6	18.3	18.3	20.4	20.4	48.8	44.7	133.3	22.2	12.7	55.8	64.8	44.4	13.9	85.8
〃 標準偏差値			5.20	5.33	—	7.38	0.78	0.79	1.04	0.94	6.47	5.28	19.81	2.28	4.74	7.92	7.46	4.48	0.34	9.97
S43平均値			170.2	61.7	—	215.0	18.2	18.1	20.8	21.0	44.7	40.6	148.5	21.1	13.4	57.9	61.8	43.5	14.6	98.5
〃 標準偏差値			4.42	4.84	—	3.08	0.66	0.76	1.19	1.23	5.72	6.27	20.76	2.10	6.01	6.09	6.16	3.43	0.52	10.73

S43～46年度インターハイ出場ハンドボール選手　体力測定　年別平均値と標準偏差値並びにS46年度チーム別平均値と標準偏差値　　（女子）

番号	チーム名	所属都道府県名	身長	体重	胸囲	指先長	手長 右	手長 左	手巾 右	手巾 左	筋力 握力 右	筋力 握力 左	筋力 背筋力	筋力 反復上体おこし	柔軟性 立位体前屈	柔軟性 伏臥上体そらし	瞬発力 垂直跳	敏捷性 サイドステップ	敏捷性 9m 3往復走	持久力 踏台昇降（5分間）
		単位	cm	Kg	cm	cm	cm	cm	cm	cm	Kg	Kg	Kg	(20秒)回	cm	cm	cm	点	秒	指数
1	国学院栃木	栃木	163.7	59.7	84.6	205.6	17.5	17.2	19.0	19.2	38.4	33.4	95.3	14.6	17.0	65.0	45.9	40.1	15.0	85.52
2	涌谷	宮城	160.0	56.7	83.3	200.3	16.6	17.0	18.4	18.2	35.3	33.0	93.6	13.7	18.0	63.0	48.3	38.6	14.9	91.86
3	夙川	兵庫	157.1	50.7	84.0	193.6	16.6	16.8	17.6	17.6	31.4	28.3	90.6	14.6	17.6	62.0	49.3	40.3	14.9	87.88
4	有磯	富山	156.1	56.0	84.7	197.7	16.7	16.8	18.7	18.3	36.0	33.6	106.9	13.4	22.3	66.6	46.7	44.0	14.8	85.23
5	城北	静岡	160.9	55.6	80.6	201.4	16.7	16.3	19.3	19.3	34.4	33.0	108.7	13.0	21.0	64.0	50.7	48.9	14.2	105.51
6	秋田和洋	秋田	160.6	58.9	84.6	202.1	16.9	17.4	18.5	18.3	37.6	35.2	101.1	14.7	18.4	63.4	53.1	44.7	14.4	97.43
7	浦添	沖縄	155.3	51.0	83.9	194.4	16.2	16.1	19.0	18.9	32.7	29.1	87.9	12.3	17.3	61.1	44.6	40.4	15.1	89.60
8	名女商	愛知	159.0	56.3	81.6	202.0	17.3	17.1	18.3	17.8	35.7	31.6	98.3	12.4	15.0	58.9	42.1	37.6	15.6	101.02
9	暁	三重	156.6	53.7	82.4	195.9	17.2	17.2	18.3	18.4	33.9	30.1	109.4	12.7	14.6	61.9	46.4	39.6	15.1	102.35
10	別府青山	大分	157.9	52.3	81.3	198.3	15.4	15.4	19.0	19.0	33.7	30.9	112.9	13.6	16.1	63.1	47.3	44.0	14.8	97.85
	全体平均値		159.10	55.54	83.00	199.65	16.77	16.80	18.57	18.45	35.16	32.08	101.86	13.41	17.90	63.10	47.76	41.97	14.85	95.02
	〃 標準偏差値		4.69	5.82	3.51	7.39	0.92	0.97	1.14	1.10	4.18	3.80	15.02	1.32	5.25	5.99	5.10	4.24	0.62	14.06
	S45平均値		158.14	53.59	82.45	198.61	17.59	17.65	19.09	18.90	32.26	29.05	109.79	13.33	16.79	59.68	49.60	42.85	14.99	83.48
	〃 標準偏差値		4.51	5.37	3.46	6.81	0.80	0.92	0.98	1.03	4.83	4.25	15.04	1.98	5.15	5.81	5.03	3.51	0.50	9.70
	S44平均値		158.7	54.5	—	199.9	16.4	16.8	18.3	18.4	34.4	31.3	89.2	13.8	171.1	59.4	48.5	42.1	15.0	89.4
	〃 標準偏差値		4.58	4.89	—	7.15	0.86	0.84	1.05	0.97	4.38	4.26	12.70	1.55	4.26	5.65	5.21	2.51	0.49	9.57
	S43平均値		159.2	55.0	—	200.7	17.1	17.1	18.8	18.8	28.9	26.0	103.9	12.9	16.1	59.7	47.8	41.1	15.4	96.5
	〃 標準偏差値		4.41	4.92	—	6.73	0.37	0.96	1.03	1.02	4.22	4.31	18.50	1.36	5.72	5.30	5.69	2.40	0.47	14.24

大崎電気、中大若手を制す

各地の記録

女子は東京重機3連勝
強豪集めた東京選手権

トップチームが参加した第10回東京都選手権は11月3日から9日まで東京国立市の東京重機工業球技場に男子18、女子9チームによってトーナメントで行われた。

全日本総合(12月)の前哨戦ともいうべき男子は前年優勝の東京教員を主力とした東京スターズが2回戦で法政の若さに敗れる波乱があり、ベストフォアには学生3強と大崎電気が残り球趣を高めた。

決勝は大崎×中大の対決から新人で固めた中大がいきなり4—0とリード、ベストメンバーの大崎はしだいに追いあげ後半なかばから主導権を握って制勝、3年ぶり5度目の優勝を飾った。

女子は実業団勢とベテラン揃いの美和クが勝ちあがり、東京重機が日本ビクター(茨城)を延長の末破って3連勝した。なお、3位の美和クは全日本総合の東京代表に決まった。

▽男子1回戦（2試合）

法政大 14—11 芝浦工大

東京学芸大 10—5 全国士館

△同2回戦

法政大 10—8 東京スターズ

東京学芸大 9—8 府中ク

明星ク 棄権 全育英

中央大 24—9 日体イーグルス

国士舘大 17—11 全日体大

大崎電気 17—8 全立教

早稲田大 13—13 日大

抽せんで早大の勝ち

日体大 15—9 法友会

▽同準々決勝

法政大 21—6 東京学芸大

中央大 16—11 明星ク

大崎電気 22—19 国士舘大

日体大 14—13 早稲田大

▽同準決勝

中央大 19（10—9 9—5）14 法政大

大崎電気 18（11—6 7—8）14 日体大

▽同決勝

大崎電気 21（8—8 13—8）16 中央大

【中央】	得
GK 柴田	0
GK 田村	0
FP 松本	2
FP 上村	2
FP 藤本	1
FP 松下	3
FP 戸田	4
FP 小川	0
FP 足立	0
FP 大熊	0
FP 佐野	4

FP（審・近藤、大塚）

【大崎】	得
GK 岩下	0
GK 下里	0
FP 近森	7
FP 飯田	3
FP 東	2
FP 谷口	1
FP 佐藤	1
FP 沢田	4
FP 前淵	3
FP 坂口	0

21（2）7MT（0）16

▽女子1回戦（1試合）

ビクター球友会 12—6 日女体大

▽同準々決勝

大崎電気 15—9 東花ク

東京重機 9—3 ビクター球友会

美和ク 11—6 東京学芸大

日本ビクター(茨城) 15—5 日体大

▽同準決勝

東京重機 15（4—4 11—2）6 大崎電気

日本ビクター 25（14—1 11—2）3 美和ク

▽同決勝

東京重機 14（2—6 10—6 ： 0—0 2—0）12 日本ビクター

【ビク】	得
GK 渡辺	0
FP 蓮見二	1
FP 八重樫	2
FP 蓮見彰	2
FP 谷沢	3
FP 山口	0
FP 高野	4

【東京】	得
GK 長岡	0
GK 上杉	0
FP 牧野	4
FP 古佐原	2
FP 市川	2
FP 村上	1
FP 葛西	1
FP 松本	0
FP 鈴木	3
FP 荒木	0
FP 生井	1
FP 菊地	0

14（2）7MT（1）12

（注）この大会の参加チームは東京に限らず、日本協会登録チームなら所属協会を問わない「オープン化」を布いている。

蒲郡ク優勝、新風吹きこむ

第3回東海クラブ選手権は10月1日と15日名古屋・愛知県体育館に東海4県から男子16チームが参加して行われた。

3年目を迎えてこの大会もすっかり定着、各クラブとも元気いっぱいの試合ぶりをみせたが、優勝争いに残ったのは名門桜丘会（愛知）、清商ク(静岡・国体東海代表）の両チームに第1回優勝の名城クと新進・蒲郡ク(ともに愛知)。

準決勝で桜丘会が清商クを破り蒲郡クとの決勝も優位とみられたが、蒲郡クはすばらしい闘志で前半をリード、後半も互角に運んで鮮やかな初優勝を飾り、桜丘会の2連勝を阻んだ。

固定化していた東海のクラブ界に蒲郡クの進出は新風を吹きこむものと高く評価される。

なお、女子は2チームが参加を申しこんだが名古屋クが棄権、清商ク(静岡)の認定優勝に決まった

▽男子1回戦

名城ク(愛知) 25（11—6 14—8）14 西球会(静岡)

鏡島ク(岐阜) 21（6—12 15—8）20 名大ク(愛知)

鍋の森ク(三重) 18（10—6 8—6）12 帝人製機ク(岐阜)

蒲郡ク(静岡) 14（5—5 9—4）9 蒲原ク(静岡)

東海ク(愛知) 14（7—6 4—5 ： 1—0 2—1）12 岐阜イーグルス(岐阜)

桜丘会(愛知) 27（14—6 13—13）19 静農ク(静岡)

清商ク(静岡) 23（9—5 14—4）9 愛工ク(愛知)

大江ク(愛知) 20（6—11 14—6）17 岐阜西ク(岐阜)

▽同準々決勝

名城ク 23（12−6, 11−9）15 鏡島ク
蒲郡ク 23（10−9, 13−8）17 鵜の森ク
清商ク 25（11−6, 14−11）17 大江ク
桜丘会 31（15−3, 16−7）10 東海ク
▽同準決勝
蒲郡ク 16（8−6, 8−9）15 名城ク
桜丘会 20（9−12, 11−5）17 清商ク
▽同3位決定戦
清商ク 17（6−8, 11−8）16 名城ク
▽同決勝
蒲郡ク 13（7−4, 6−6）10 桜丘会
▽女子決勝
清商ク（静岡） 不戦勝 名古屋ク（愛知）

涌谷、第2延長で敗る

▼宮城県高校新人大会（11月・塩釜高）
▽男子準々決勝
仙台 14−10 鶯沢工
宮城水産 12−6 築館
仙台商 15−9 仙台三
古川工 9−9 仙台育英
抽せんで古川工の勝ち
▽同準決勝
仙台商 15−9 古川工
宮城水産 10−6 仙台
同3位決定戦
仙台 13−8 古川工
▽同決勝
仙台商 7（3−3, 4−2）5 宮城水産
仙台商は12年ぶり2度目の優勝
▽女子決勝トーナメント1回戦
涌谷 9−5 古川商
一迫 10−8 祇園寺
宮二女 8−3 古川女
▽同準決勝
宮二女 9−5 一迫
涌谷 16−0 宮一女
▽同3位決定戦
一迫 11−4 宮一女
▽同決勝
宮城二女 7（4−3, 2−3：0−0, 0−0：0−0, 1−0）6 涌谷
宮城二女は4年ぶり2度目の優勝

三菱レイヨン大竹制覇

▼広島県第8回秋季選手権（呉商高 11月11・12日）
▽一般男子準々決勝
三菱レイヨン大竹 13−9 県教職員
広島大 棄権 日本鋼管（福山）
呉高専 15−8 近大呉
修道ク 18−15 広島商大
▽同準決勝
三菱レイヨン大竹 24−6 広島大
呉高専 23−21 修道ク
▽同決勝
三菱レイヨン大竹 35（14−5, 21−9）14 呉高専

広島一女商強し

▼広島県高校新人大会（呉商高 11月11・12日）
▽男子準々決勝
三津田 16−5 城北
修道 12−7 宮原
呉港 23−13 盈進
呉工 11−8 広
▽同準決勝
呉工 10−8 呉港
三津田 14−12 修道
▽同準決勝
三津田 8（4−2, 4−4）6 呉工
▽女子準々決勝（＝二試合）
第一女商 20−1 賀茂
豊栄 5−4 呉商
▽同準決勝
進徳 13−3 豊栄
第一女商 6−5 山陽
▽同決勝
第一女商 11（6−2, 5−1）3 進徳

天草で"底辺"の大会

▼第3回天草郡市選手権（11月12日天草高グランド）
▽男子準々決勝（参加13チーム）
タケベジャイアンツ 棄権 本渡市教員
天草高教員 19−8 セブンスター
青北ク 21−11 天農ク
ボンボン9 15−10 天草高
▽同準決勝
天草高教員 13（抽せん）13 タケベジャイアンツ
ボンボン9 12−10 青北ク
▽同決勝
天草高教員 22−12 ボンボンク
▽女子準決勝（＝1回戦）
谷脇クラブ 8−1 天草農高
倉岳高 9−8 本渡中学
▽同決勝
谷脇クラブ 17−5 倉岳高

高蔵、いぜん好調

▼愛知高校新人大会（11月名古屋）
▽男子準々決勝
名城附 23−11 中京
名南工 17−10 旭日ケ丘
桜台 23−9 春日井
岡崎工 23−8 一宮西
▽同準決勝
名城附 14−12 名南工
桜台 16−9 岡崎工
▽同決勝
名城附 11（3−3, 8−7）10 桜台
▽女子準々決勝
郁村 23−3 加茂丘
高蔵 6−3 西尾
名短付 5−4 豊橋高
一宮 15−3 中川商
▽同準決勝
高蔵 4−3 郁村
名短付 6−3 一宮
▽同決勝
高蔵 5（4−1, 1−2）3 名短付

吉田商、山梨を破る

▼山梨県高校新人大会（11月・甲府）

▽男子準々決勝

甲府 22－3 峡北

塩山 17－3 韮崎工

日川 12－9 吉田

韮崎 9－6 甲府南

▽同準決勝

日川 14－6 韮崎

甲府一 5－3 塩山商

▽同3位決定戦

塩山商 11－3 韮崎

▽同決勝

日川 18（9－6、9－1）7 甲府一

▽女子準々決勝

日川 6－4 甲府二

山梨 13－2 長坂

塩山 8－3 甲府商

吉田商 22－2 峡北

▽同準決勝

山梨 6－0 日川

吉田商 9－5 塩山商

▽同3位決定戦

日川 8－6 塩山商

▽同決勝

吉田商 4（2－0、2－3）3 山梨

岡山教員、無難に勝つ

▼岡山県一般選手権（11月・落合高）＝男子のみ

▽準々決勝

岡山教員 30－11 落合ク

児島柏会 24－10 津山高専

川崎製鉄 15－14 岡山大

倉敷商OB 21－11 全倉敷

▽準決勝

岡山教員 17－11 児島柏会

川崎製鉄 19－19 倉敷商OB

抽せんで川崎製鉄の勝ち。

▽決勝

岡山教員 25（11－4、14－13）17 川崎製鉄

高校男子は二者優勝

▼第25回滋賀県民体育大会ハンドボール競技（甲賀郡）

▽一般男子決勝

彦根クB 7（1－3、6－2）5 守山ク

▽高校男子決勝

八幡工 10（分）10 高島

両校優勝

▽同女子決勝

守山女 6－2 高島

なお、一般女子は守山市、中学男子は守山中、同女子は多賀女が決勝リーグで2勝をあげ優勝。

男子で屋代が強味

▼第5回長野県高校新人大会（11月・小諸商）

▽男子準決勝

上田 14－5 坂城

屋代 12－4 北佐久農

▽同3位決定戦

坂城 12－10 北佐久農

▽決勝

屋代 12（7－3、5－3）6 上田

▽女子準決勝

美須々ケ丘 9－4 上田城南

小諸商 32－2 北佐久農

▽同3位決定戦

上田城南 12－4 北佐久農

▽同決勝

小諸商 19（11－1、8－3）4 美須々ケ丘

中学大会記録

▼第1回沖縄中学大会（11月・仲西中）参加男子＝18、女子8

▽男子準々決勝

神森 19－6 首里B

美里 8－7 上山B

首里A 19－15 古蔵

上山A 16－5 コザ

▽同準決勝

上山A 9－7 首里A

神森 19－8 美里

▽同決勝

上山A 9（3－4、6－4）8 神森

▽女子準々決勝

コザ 14－3 仲西

古蔵 8－1 安岡

具志頭 8－7 首里

美里 10－2 浦添

▽同準決勝

コザ 18－3 古蔵

美里 10－7 具志頭

▽同決勝

コザ 8（7－1、1－4）5 美里

滋賀事務局変わる　滋賀協会の事務局が次のように変更された。

滋賀県甲賀郡水口町陵野3－6
水口中学気付・岡野　博

読者投書欄　明日への提言

一目で審判員の階級を

10月末NHKが放映したオリンピックの決勝戦は、本場ヨーロッパのトップカードを日本のファンに初めて紹介したという意味で近来にない好企画だったと思う。

ところで、この試合でデンマーク人のレフェリーがストッキングを着用、それに薄黄色の線が入っていたのは何か意味があったのだろうか。

もしこれが国際審判員のランキングを示すものだとしたら、さっそく日本でも採り入れられたらいかがか。

昨今、レフェリーへの風当りが強いように思うが、これはレフェリーがあまりにも慢然と吹笛されるからではないか。

もし、ストッキングなどでその審判員の階級がスタンドから一目で判るようになれば、自覚も増すのではないか。

そして年に一組または二組のナショナル・レフェリーを日本協会が選出し、その人たちのストッキングには特別なカラーの縞を入れるようにしたらいい。関係者の研究を望むものです。

【東京・長谷川寛二・25才】

編集後記

本年の雑誌もこの号でおわり、実にいろいろなことのあった年でした。

オリンピック、中学生大会を頂点にして、今後のハンドボール界の歴史にとってエポック・メーキングな出来事が連続してありました。

すべてが順調にいったわけではありませんが、予想通りにいかなかったものは、同じ失敗を二度とくりかえさないように、まずかった点は徹底的に改めていかなくてはなりません。

来年もまた種々のことがありましょう。今年までのことに積みあげていき、よりよい成果、よりよいハンドボール界を築きあげていきたいものです。

来年もどうぞ本誌を愛読のほどお願いします。編集部もよりよい雑誌にしていくよう努力します。

タイガー®ハンド
ハンドボール・革 ¥5,400
ハンドボール・布SP ¥1,500
ハンドボール・布A ¥1,400
Onitsuka
Tiger

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一〇四号
昭和四十年六月一日 第三種郵便物認可
昭和四十七年一一月二十五日印刷 昭和四十七年一二月 一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百円(年間購読料千八百円)